

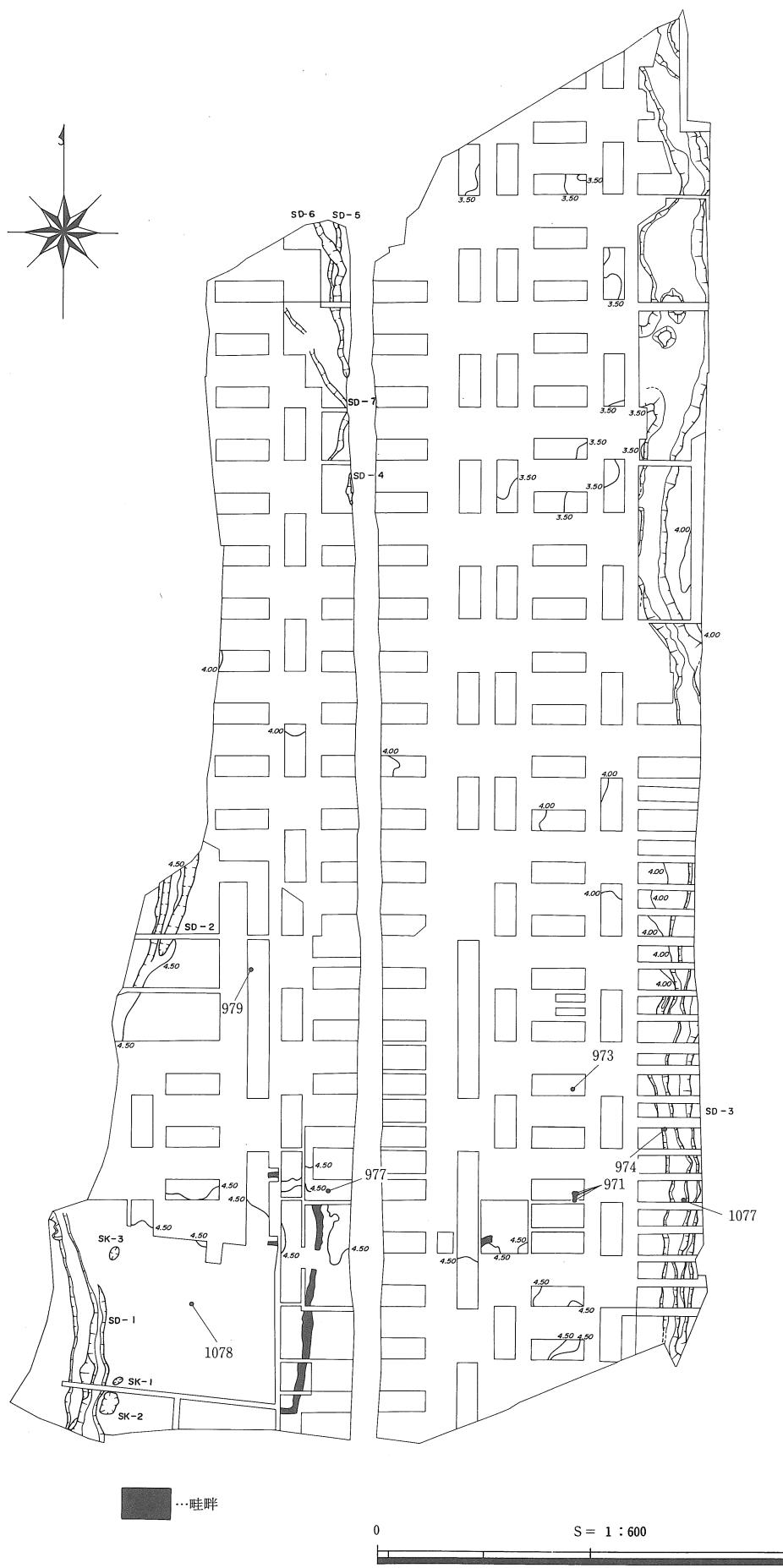
4 調査の経過と方法 (第278、284図・写真図版54、58)

調査地は東西を丘陵に挟まれた谷部の湿地帯であり、降雨時には丘陵から大量の水が流れ込むため、調査を行うにあたって排水処理は非常に重要な問題であった。そこで調査当初、調査地中央に南北に走る排水溝を設置し、その北端に2ヶ所の沈砂池を設け、調査地内の水をこれらの沈砂池を経由させることによって、調査区域外に排水していくこととした。

排土処理上の問題で、調査地全体を一度に調査することができないため、これを南北に二分せざるを得ず、片方を調査区域、もう片方を排土置場とし、片方の調査が終了後に互いを入れ替えて調査を進めるという方法を採ることとした。便宜上、排土置場と中央排水溝によって区分された4つの地域を、それぞれa区、b区、c区、d区と称して調査を行った。調査地中央に設定した排水溝はそのまま予察トレンチとして活用し、青灰色シルト層以下が無遺物層であることを確認した。

調査地の面積は7,100m²で、平成6年4月から12月まで現場作業が実施され、前半に調査地南半分のa・b区、後半に北半分のc・d区の調査を行った。

プラント・オパール分析の結果、青灰色シルト層より上に位置する殆ど全ての層からイネのプラントオパールが高い密度で検出されており、水田耕作が始まって以来、現代まで連綿と水田耕作が行われてきたことが明らかとなった。プラント・オパールのサンプリングA地点では、青灰色シルト層直上に暗灰色粘質土層（青灰色シルト混じり）が存在しているが、この層からはイネのプラント・オパールが殆ど検出されなかった点から、青灰色シルト混じりの層は水田耕作前の形成層と判断した。本調査はこの分析の結果に基づき、最下層の水田の畦畔検出に主眼を置いて行った。（以下、最下層の水田を水田層と記す。）調査にあたっては、プラント・オパール分析



第284図 全体遺構実測図

のサンプリングA・C地点7層以下を調査の対象とし、それより上層を表土として剥ぎ取った。

水田面は平面的に捉えにくく、基本的に 5×2 mのトレンチを、南北軸に則して一定の間隔のもと規則的に設置し、その土層断面をもとに畦畔の平面的なつながりを追求していくという方法を採った。また、遺構を追求するために、トレンチは隨時拡張した。トレンチ名は、a区の第1トレンチをa T 1とし、以下同様にb・c・d区の第1トレンチをそれぞれb T 1・c T 1・d T 1とした。プラント・オパール分析の結果と中央排水溝による予察調査から、青灰色シルト層以下に水田耕作の痕跡が見られないことから、各トレンチでは青灰色シルト層の上面までを掘り下げるのこととした。

トレンチ断面の調査を進めたところ、プラント・オパール分析の結果で水田層と推測された層の下層（黒灰褐色粘質土層）に、畦畔を確認することができた。これはいずれのサンプリング地点にも存在しない層である。そこで調査の方針を軌道修正して、この黒灰褐色粘質土層を水田層と考え、その平面的なつながりを追求していくこととした。

青灰色シルト層までの掘り下げの結果、調査初期にa区から溝状遺構や土坑が検出されたことから、この青灰色シルト層の上面を遺構面と考え、水田跡の追求とともに、その他の遺構の検出にも努めた。青灰色シルト層と水田層との間から須恵器や土師器が出土しており、遺構面の時期は古墳時代後期以降と考えられる。

調査中は天候の影響を強く受けた。a・b区は春から夏にかけて調査を行ったのであるが、例年ない夏場の猛暑の影響を受けて調査地の土壤が極度に乾燥し、土層断面の土色の確認が困難となる状況が見られた。a・b区の調査とは逆に、c・d区の調査は晚秋から初冬にかけて、雨・雪で常に土壤が湿っている中で行われた。このため、両区域の土層を対比することが容易ではなく、水田層のつながりを捉えることは非常に困難であった。

各遺構は掘り下げ後に実測、写真撮影を行った。全景写真はa・b区、c・d区ごとに撮影した。調査前の地形測量は、業者委託により行い、調査後の地形は平板測量した。

平成6年5月には米子市立就将小学校6年生が本遺跡を訪れ、発掘作業を体験した。

出土遺物については同年11月に行われた陰田第6遺跡現地説明会において、一般公開した。

参考文献

- 杉山真二・藤原宏志（1987）川口市赤山陣屋跡遺跡におけるプラント・オパール分析。赤山－古環境編－。川口市遺跡調査会報告、10：p.281-298。
- 杉山真二（1987）遺跡調査におけるプラント・オパール分析の現状と問題点。植生史研究、第2号：p.27-37
- 杉山真二（1987）タケ亜科植物の機動細胞珪酸体。富士竹類植物園報告、第31号：p.70-83。
- 藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－。考古学と自然科学、9：p.15-29。
- 藤原宏志（1979）プラント・オパール分析法の基礎的研究(3)－福岡・板付遺跡（夜臼式）水田および群馬・日高遺跡（弥生時代）水田におけるイネ（O.sativaL.）生産総量の推定－。考古学と自然科学、12：p.29-41。
- 藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)－プラント・オパール分析による水田址の探査－。考古学と自然科学、17：p.73-85。
- 室井綽（1960）竹籠の生態を中心とした分布。富士竹類植物園報告、5：p.103-121。
- 高槻成紀（1992）北に生きるシカたち－シカ、ササそして雪をめぐる生態学－。どうぶつ社。

第3節 遺構と遺物

1 概要（第278・284図）

a区には31ヶ所のトレンチを設置し、断面観察によって畦畔を確認することができた。これをもとに、平面的なつながりを追求した結果、a区東側には約20mにわたって畦畔を検出することができた。西側では、遺構面で

ある青灰色シルト層上面に、荒神谷山からの谷地形の延長部と思える河川跡2本（SD-1・SD-2）と土坑3基（SK-1～SK-3）を検出した。

b区には45ヶ所のトレンチを設置した。調査の結果、中央南寄りにごく一部ではあるが畦畔を検出することができた。東端のトレンチ列では、各トレンチで溝状の落ち込みを検出した。その後、トレンチを拡張して掘り下げることにより、南北に連なる河川跡（SD-3）と判明した。

c区には62ヶ所、d区には33ヶ所のトレンチを設置した。c区東端のトレンチ列ではb区で検出された河川跡（SD-3）の延長部が、d区東端部では小規模の河川跡4本（SD-4～SD-7）が検出されたが、c・d区ともに、水田畦畔を検出することはできなかった。

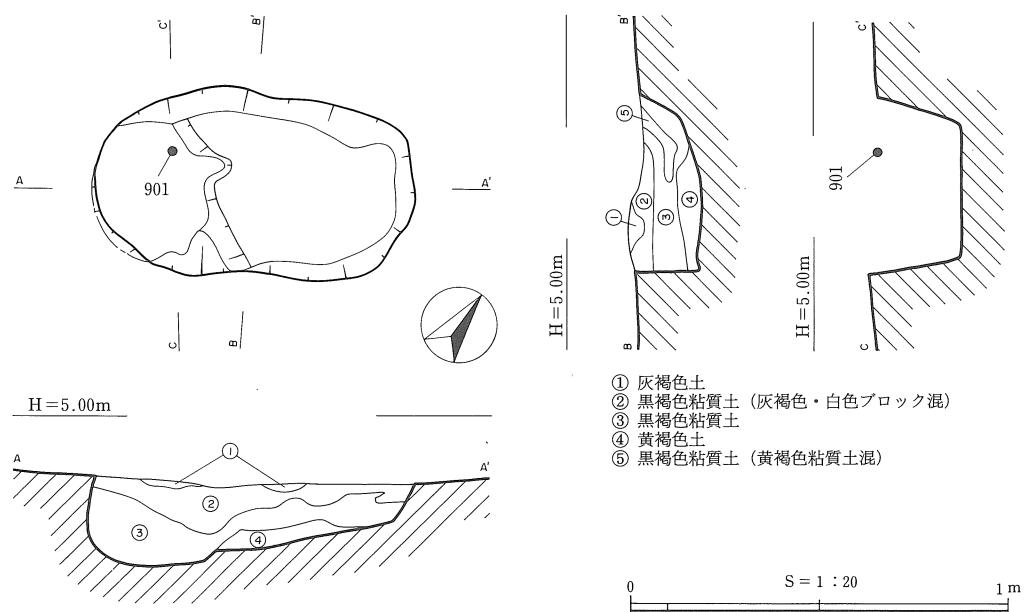
本遺跡からは、土馬・墨書き器・円面鏡等の遺物が出土している。

2 土坑（SK-1～SK-3）（第285～289図・写真図版59）

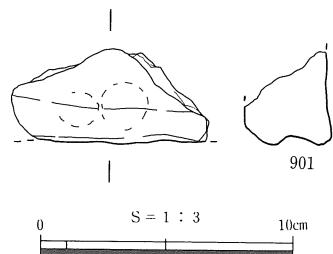
a区西側からは、古墳時代後期～奈良時代のものと考えられる土坑を3基（SK-1～SK-3）検出した。3基の土坑はともに陰田荒神谷遺跡の谷地形の延長部と推測されるSD-1の近辺から検出された。陰田荒神谷遺跡の調査においても谷地形周辺部から似たような埋土を持つ4基の土坑が検出されており、ともにSD-1の流域に形成されている。機能は不明である。

SK-1は、長径約90cm、短径約50cmの南北方向に長い小判形をした土坑であり、南側の底部が段状に5cm程度低くなっている。上部底面の周辺遺構面からの深さ（以下、深さと記す）は約15cm、下部底面の深さは約20cmである。SD-1に近接した地点に検出された。SK-1からは支脚の破片（第286図901）が出土している。

SK-2は長辺が約2.1m、短辺が約1.3mの隅丸方形の土坑である。南北両端が深さ約10cmで中央部から僅か



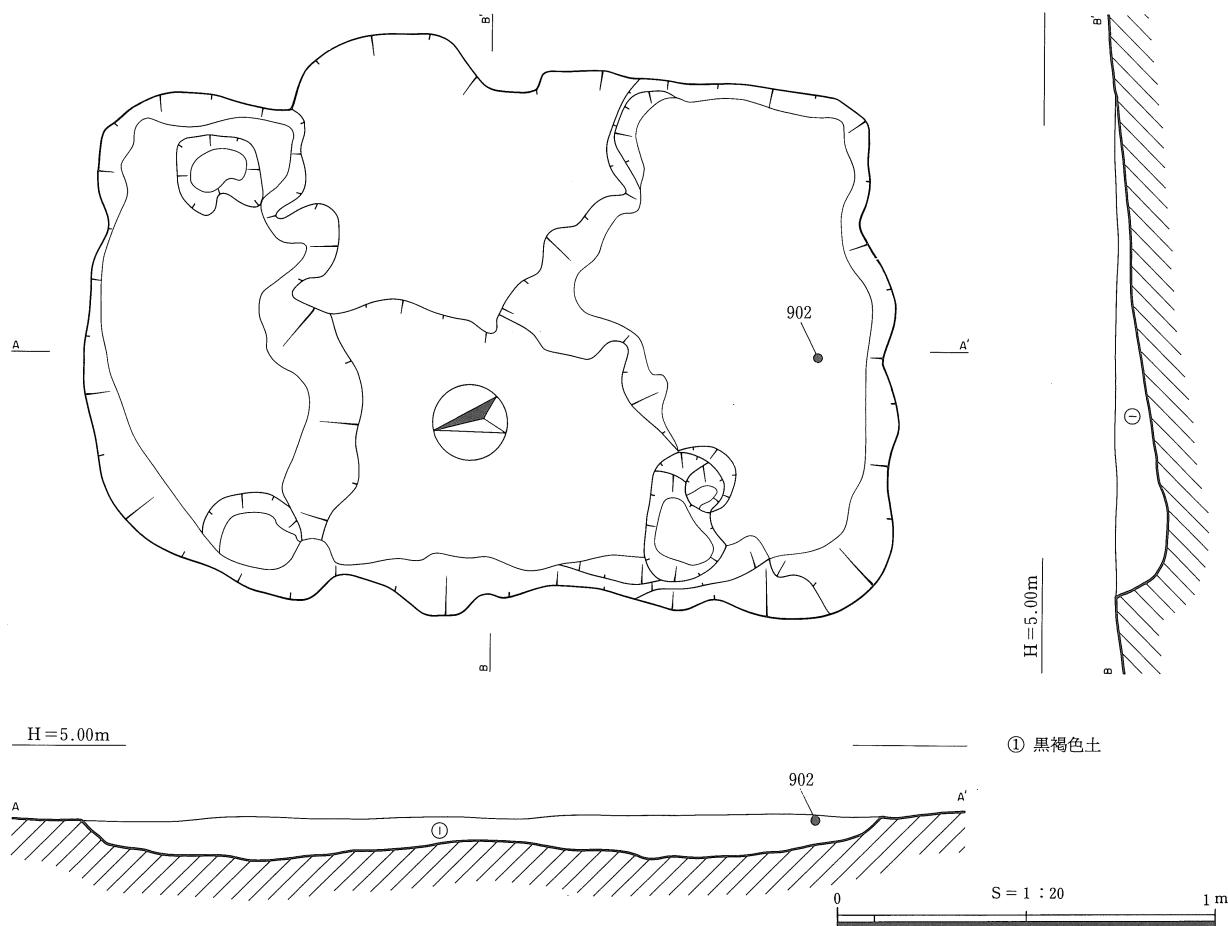
第285図 SK-1 実測図



第286図 SK-1 出土遺物
実測図

に窪んでおり、その中央部は東から西に傾斜している。SK-2は、SK-1から約70cmと近接した地点に検出されており、それぞれは互いに関連した遺構ではないかと想像できる。SK-2からは、擬宝珠のつまみをもつ須恵器の蓋（第288図902）が出土している。装飾のある椀の蓋と思われる（註1）。

SK-3は長径約1.2m、短径約80cm、深さ約20cmのほぼ橿円形をした土坑である。土師器の破片が出土している。

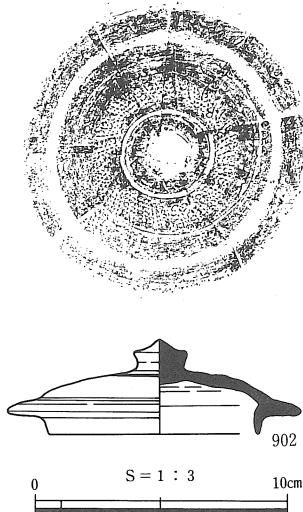


第287図 SK-2 実測図

3 河川跡 (SD-1～SD-7) (第290～294図・写真図版60)

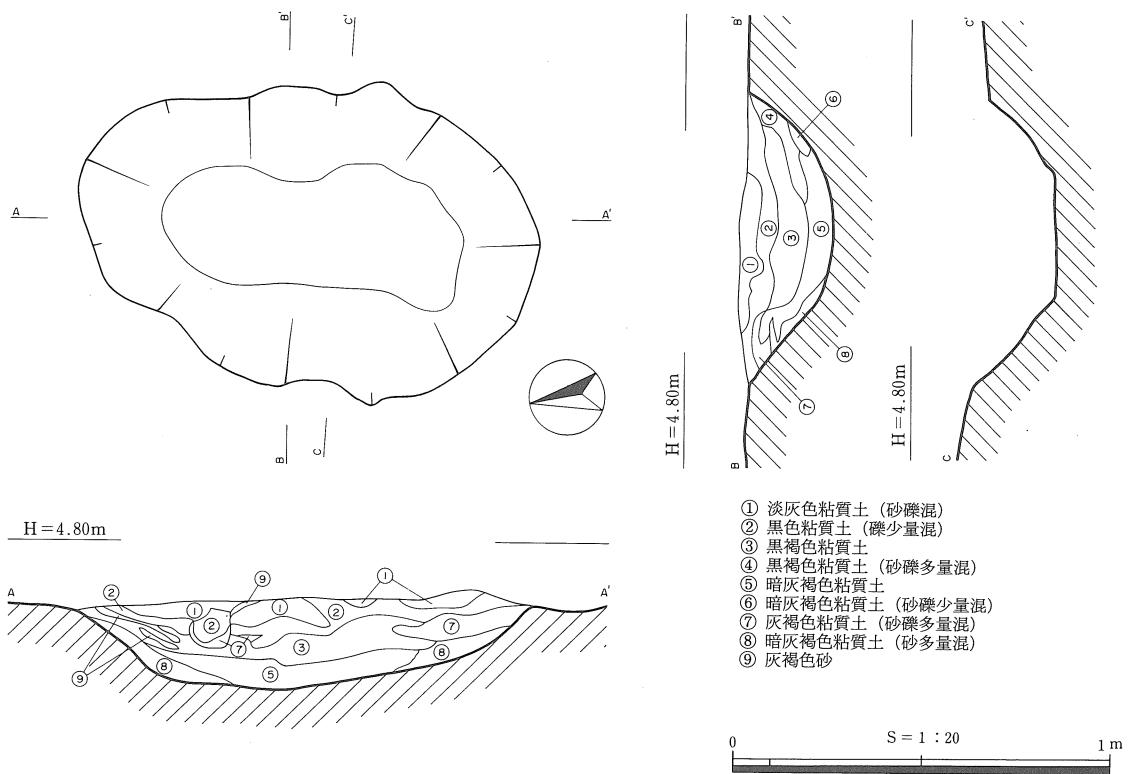
全体で7本の自然河川跡を検出した。とともに水田層形成前の遺構である。

a区南西端では、調査当初に設定したa T 1とa T 5から、荒神谷山から進展する地山層上に溝状の落ち込みを確認した。トレンチを拡張し、南北にのびる幅約1.5～4m、深さ約20～35cmの溝状の遺構 (SD-1) を約22mにわたって検出した。この遺構は陰田荒神谷遺跡の谷地形延長部と考えられ、谷から流水路跡 (河川跡) と判断した。SD-1は段状に検出されており、当初、遺構の下部を流れていた河川が、土壤の堆積に伴って川底を上昇させて、上部に流路を変えていったことが推測できる。a区北西端でも、荒神谷山の地山層上に幅約1.2m・深さ約15～30cmの河川跡 (SD-2) を約12mにわたって検出した。上・下に2本の流路跡を検出していることから、SD-1同様に下部から上部に流路を変更していったことが推測される。ともに荒神谷山裾部の地形に沿って地山層上に検出されており、両河川跡は一連の遺構である可能性が強く、水田形成以降は用水路として利用されたと思われる。



第288図 SK-2 出土遺物
実測図

b区東端のトレンチ列では、水田層下に広がる青灰色シルト層とマノカンヤマから進展する地山層の上面を追求していくことによって、約110mにわたって自然河川跡 (SD-3) を検出した。SD-3の土層断面からは、水田層と青灰色シルト層との間に幾重にも堆積した砂礫層が確認できた。b区では川底がシルト層で、比較的検出は容易であったが、c区ではシルト層がほとんど確認できず、緑灰色礫層上面まで検出した。緑灰色礫層はSD-3形成以前の河川跡と思われる。シルト層は河川の流れの中で浸食によって削り取られたと考えられる。川岸についても、b区では青灰色シルト層とマノカンヤマの地山層とを追求することによって、比較的容易に両岸を



第289図 SK-3 実測図

検出することができたが、c 区では、遺構面の土色が明るい青灰色からやや暗い灰褐色がかった色に変わっていくことから遺構面の判断が難しく、川岸肩部の検出には非常に手間取った。トレンチ断面の観察結果から、SD-3 西岸トレンチでも落ち込みが見られ、河川の広がりを確認できた。検出した SD-3 の形成以前にはもつと規模の大きな河川が流れていたと推測される。また、トレンチの断面に見られる砂礫層の堆積状況から、SD-3 は土砂の堆積によって川底が徐々に上昇し、最低でも 4 回の流路変更をしていったことが確認できた。特に b T15 南側断面を見ると、幅約 1.5m・深さ約 15cm の河川跡、幅約 1.4m・深さ約 20cm の河川跡 2 本、および幅約 1.6m・深さ約 30cm の河川跡の 4 本の河川跡が確認できる。SD-3 は降水量が多い時期に氾濫を起こし、その結果として河川流域が氾濫原となって湿地帯を形成したものと推測できる。

SD-3 からは須恵器・土師器・土馬・木製品等多くの遺物が出土しているが、その殆どは上流から運ばれてきた物か、隣接する陰田マノカンヤマ遺跡堤ノ下地区や陰田ヒチリザコ遺跡からの転落物であると考えられる。川底部では縄文土器や弥生土器も出土しており、水田層形成前の遺構であることを裏付けている。

現況において調査区域東端には南北方向に用水路が流れおり、流域の水田に農業用水を供給している。SD-3 は現況の用水路とほぼ平行する位置に検出されており、水田耕作が始まって以来、水田に用水を供給し続けたものと推測できる。

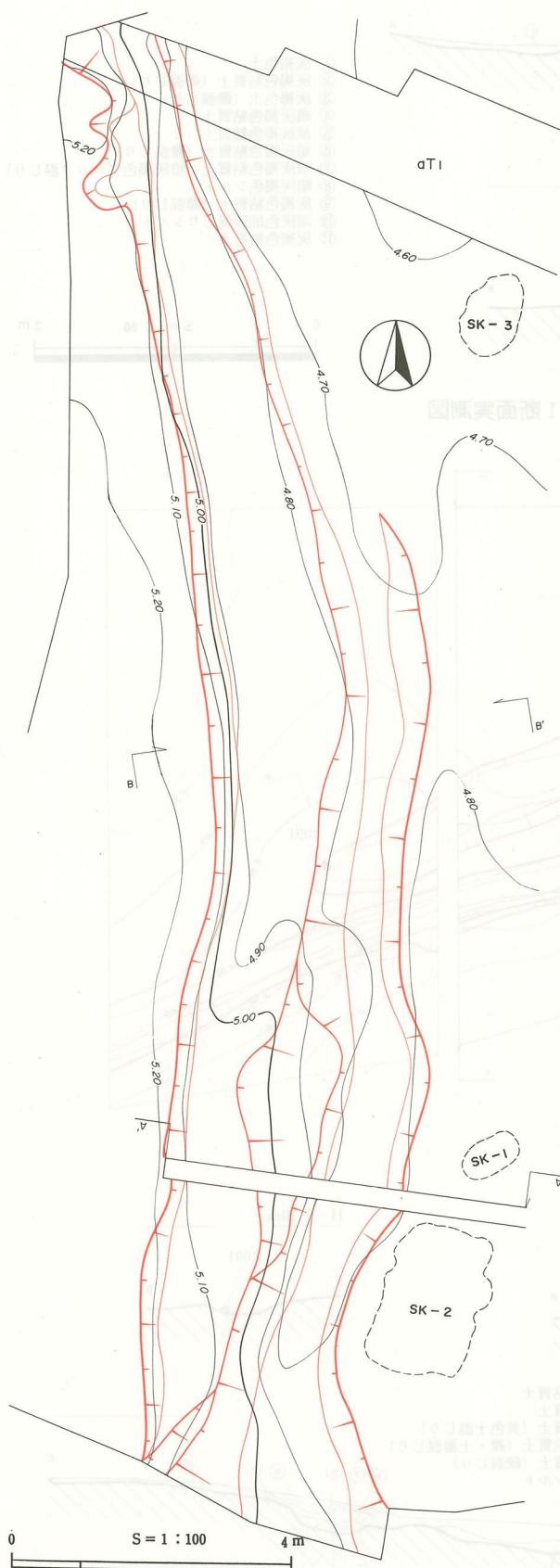
d 区では、トレンチ掘り下げの結果、dT13 と dT19～dT24 の遺構面上に砂層の連なりを確認した。その後、これらのトレンチ周辺を拡張、砂層部を追求して掘り下げた結果、幅約 10～20cm、深さ約 5～20cm 程度の小規模な河川跡 4 本 (SD-4～SD-7) を検出した。

4 水田跡 (第295~299図・写真図版61、64、65)

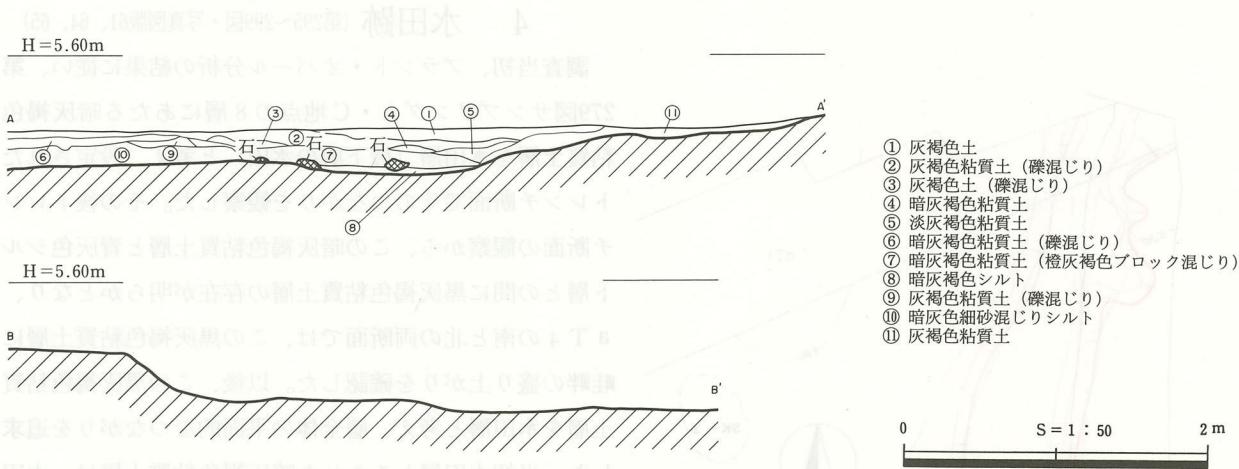
調査当初、プラント・オパール分析の結果に従い、第279図サンプリングA・C地点の8層にあたる暗灰褐色粘質土層を水田層（最下層の水田）と考え、設定されたトレンチ断面でそのつながりを観察した。その後トレンチ断面の観察から、この暗灰褐色粘質土層と青灰色シルト層との間に黒灰褐色粘質土層の存在が明らかとなり、a T 4の南と北の両断面では、この黒灰褐色粘質土層に畦畔の盛り上がりを確認した。以後、この黒灰褐色粘質土層を水田層と考え、層全体の平面的なつながりを追求した。当初水田層とみなした暗灰褐色粘質土層は、水田層確認の目安として扱った。（以下、この暗灰褐色粘質土層を水田層上層と記す。）

a T 4 南北両断面で確認された畦畔を平面的に検出していくために、a T 4周辺を拡張して掘り下げた。a T 4の北側ではa T 16南壁までの約4.5mしか検出できなかつたが、南側では南北に連なる幅70cm程度の畦畔を約15mにわたって検出した。a区ではa T 10の東側断面にも畦畔を2ヶ所確認したことから、トレンチを部分的に東に拡張して掘り下げ、東西方向に平行に位置する幅50cm程度の2本の畦畔を約1m検出した。b区でもb T 33西側断面から畦畔を確認し、トレンチを拡張して掘り下げた結果、幅50cm程度の畦畔を約1.2m検出した。c・d区では水田畦畔は検出できなかつた。

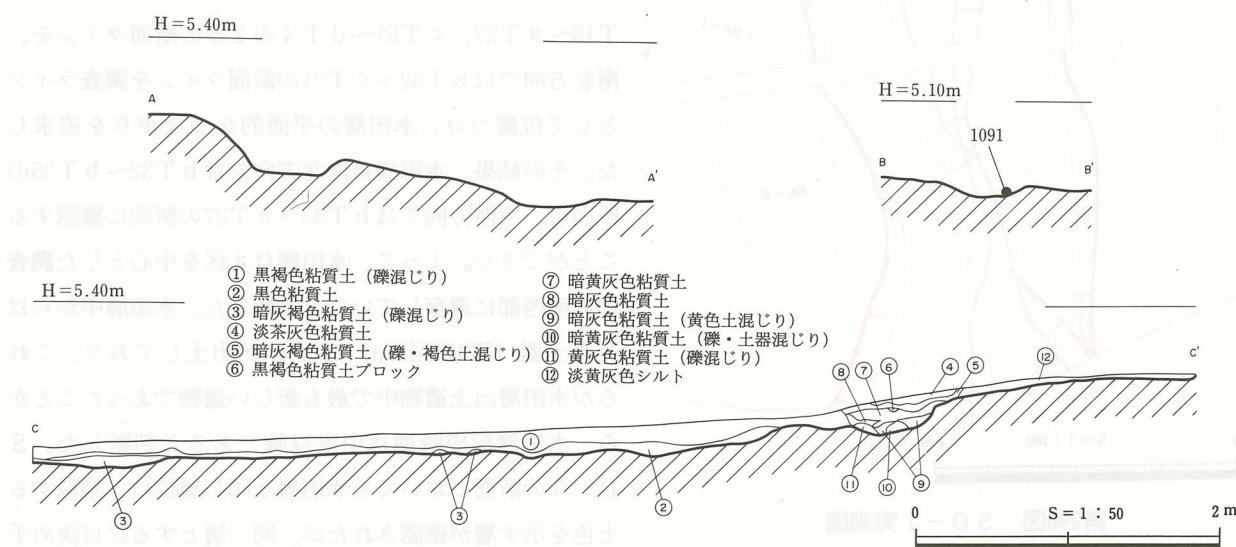
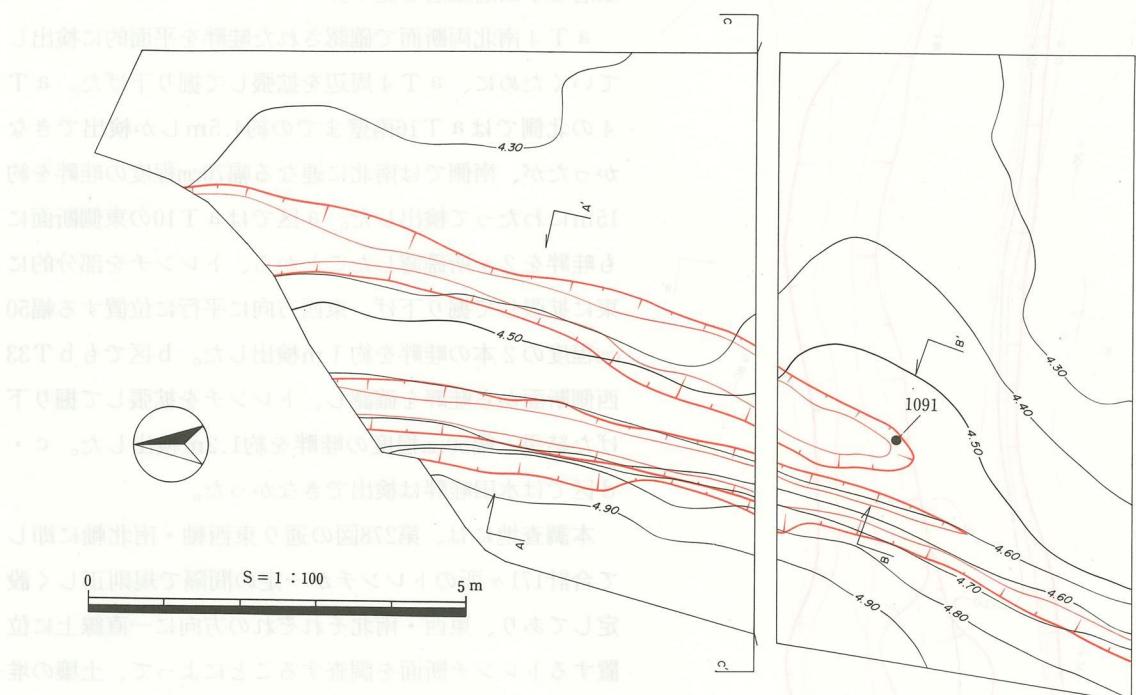
本調査地には、第278図の通り東西軸・南北軸に即して合計171ヶ所のトレンチが一定の間隔で規則正しく設定しており、東西・南北それぞれの方向に一直線上に位置するトレンチ断面を調査することによって、土壤の堆積状況を把握するという方法を探った。東西方向ではb T 15～a T 27、c T 51～d T 4の2本の断面ラインを、南北方向ではb T 32～c T 21の断面ラインを調査ラインとして位置づけ、水田層の平面的なつながりを追求した。その結果、水田層は南北方向ではb T 32～b T 35の断面に、東西方向ではb T 33～a T 27の断面に確認することができた。よって、水田層はa区を中心とした調査地の南西部に遺存していたと判断した。水田層中からは瓦質土器（第317図1137～1140）が出土しており、これらが水田層出土遺物中で最も新しい遺物であったことから、水田層形成時期は中世以降であると判断した。SD-3の断面においても水田層と同じ層位に、類似する土色を示す層が確認されたが、同一層とするには決め手を欠いており、水田層と判断するには至らなかつた。



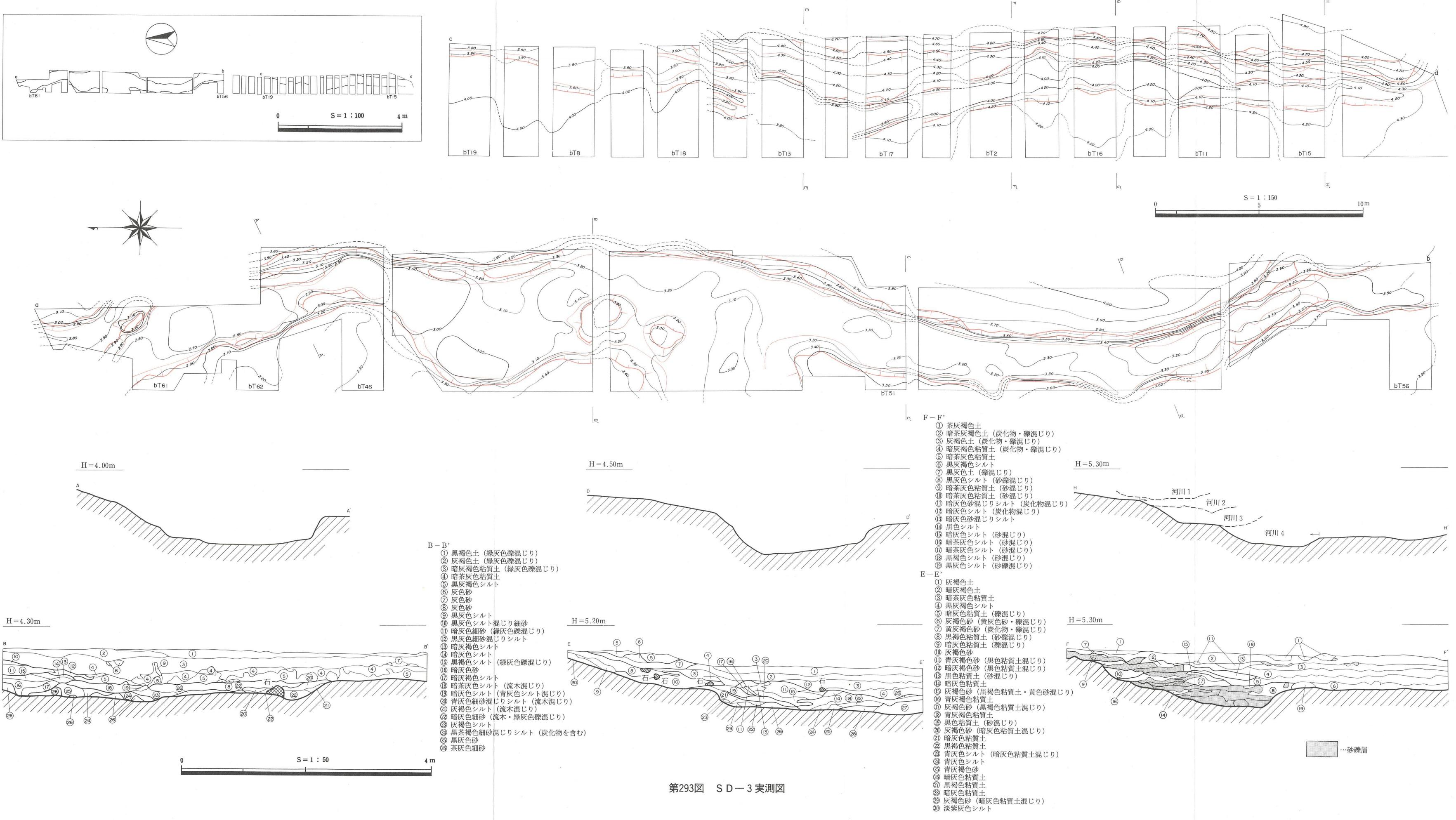
第290図 SD-1 実測図



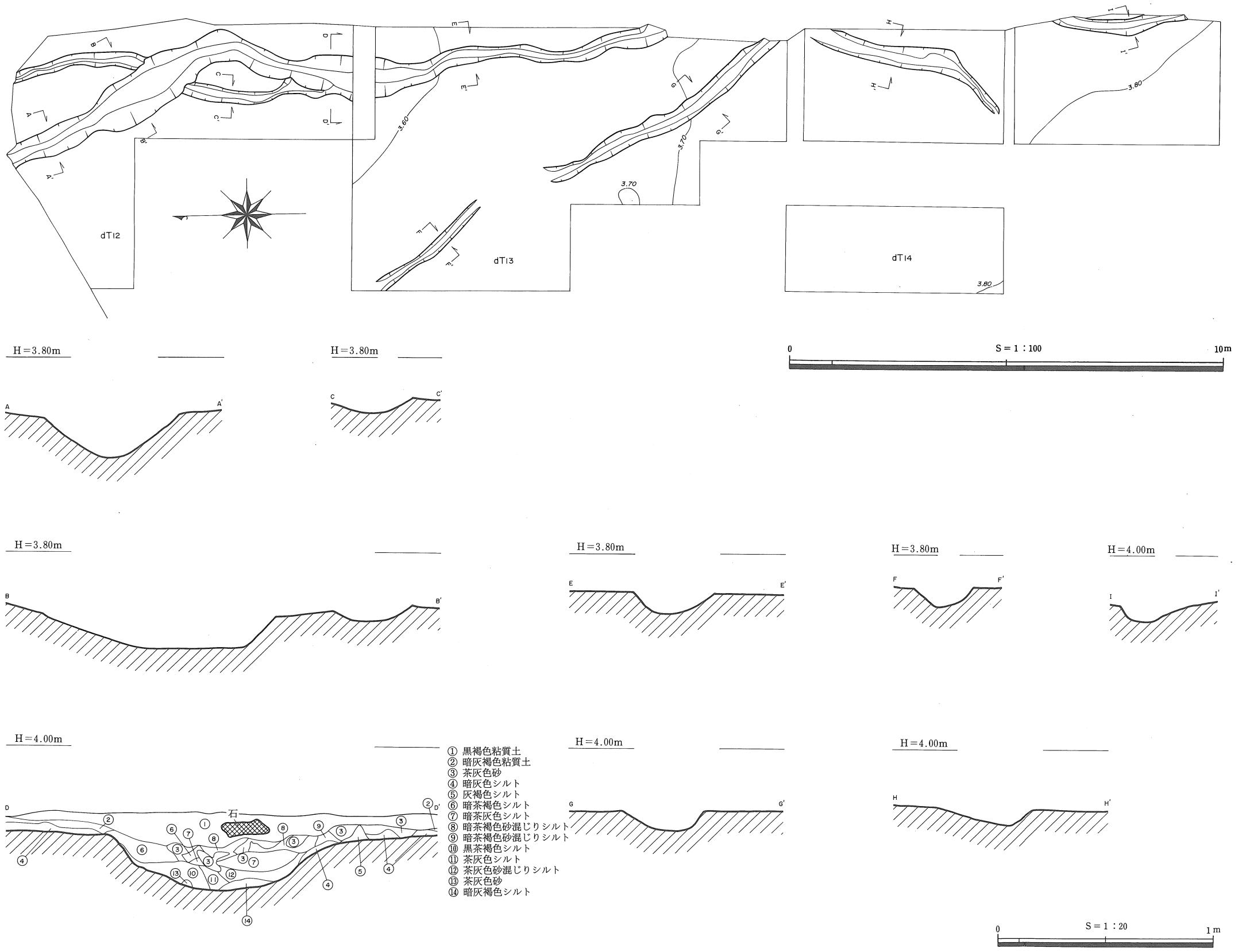
第291図 SD-1 断面実測図



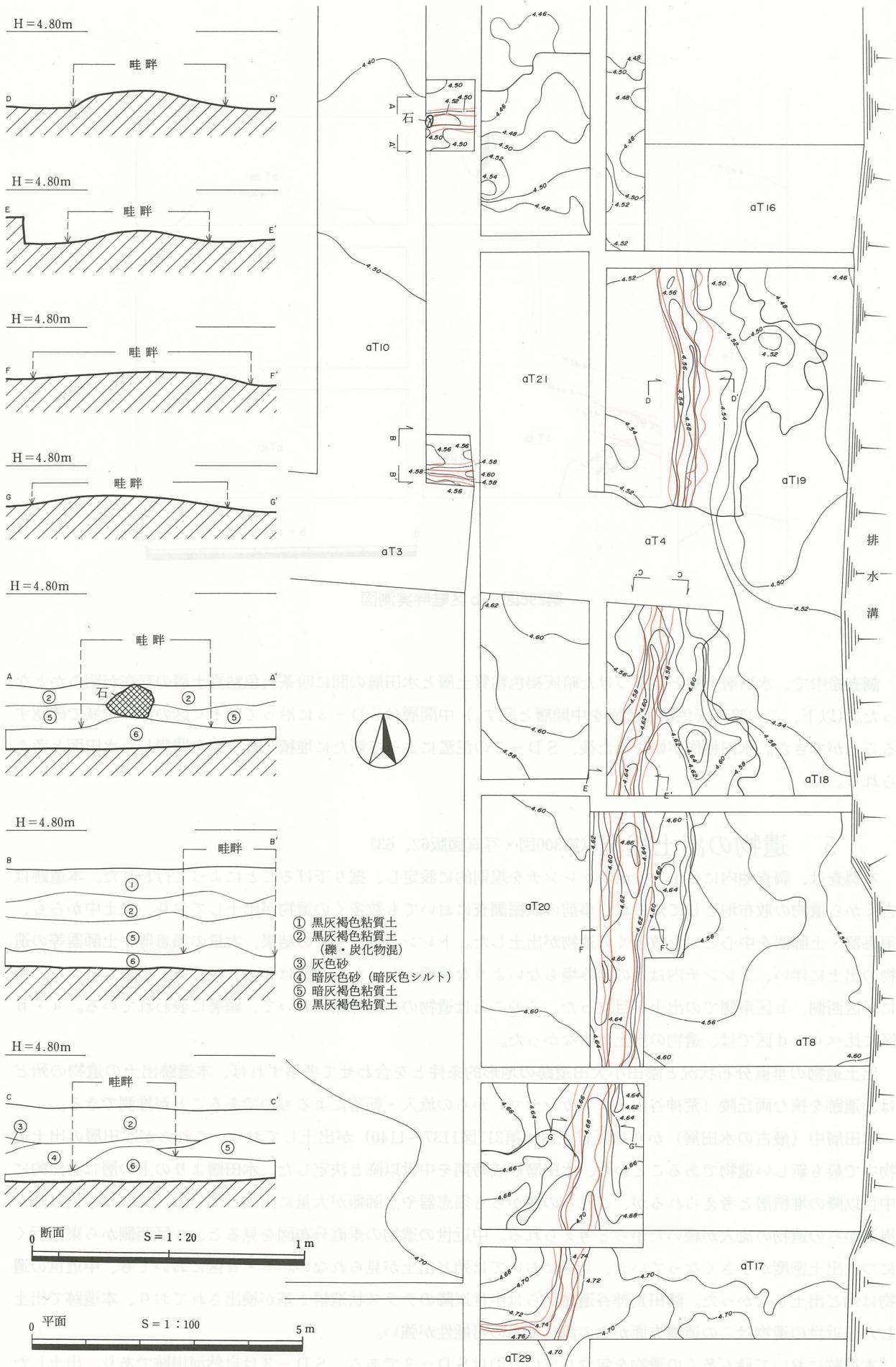
第292図 SD-2 実測図



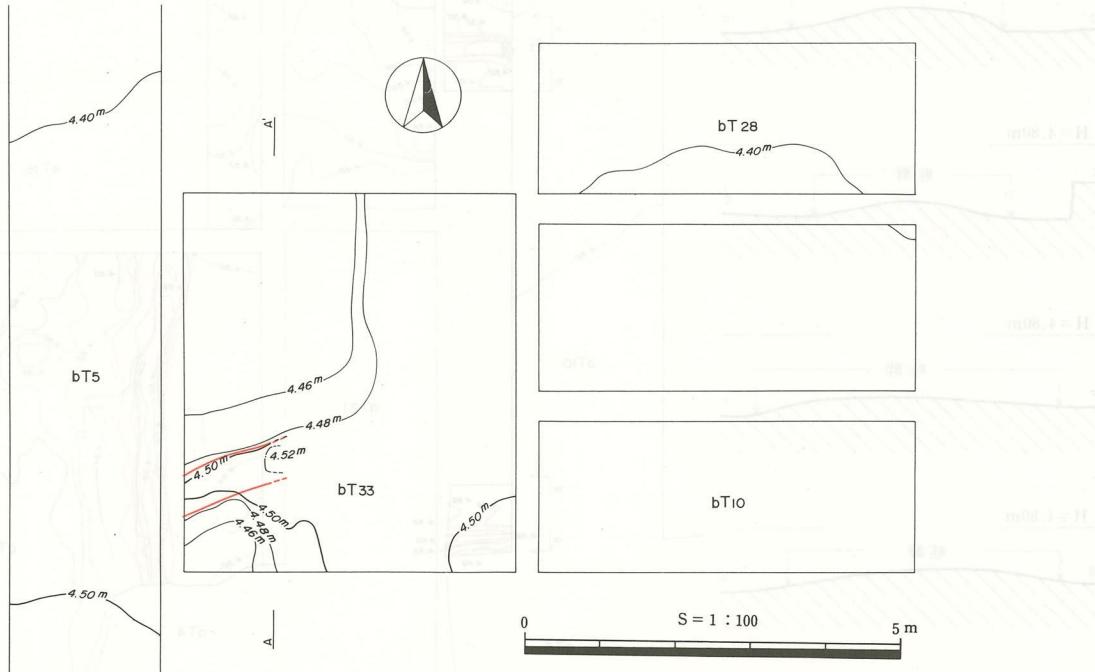
第293図 SD-3 実測図



第294図 SD-4、5、6、7実測図



第295図 a 区畔実測図



第296図 b 区畠畔実測図

調査途中で、水田層上層と位置づけた暗灰褐色粘質土層と水田層の間に暗茶灰色粘質土層の存在が明らかとなつた。(以下、この暗茶灰色粘質土層を中間層と記す。) 中間層はSD-3に沿ってb・c区のほぼ全域で確認することができた。水田耕作が始まった後、SD-3の氾濫によって新たに堆積した土壤を開墾した水田面と考えられる。

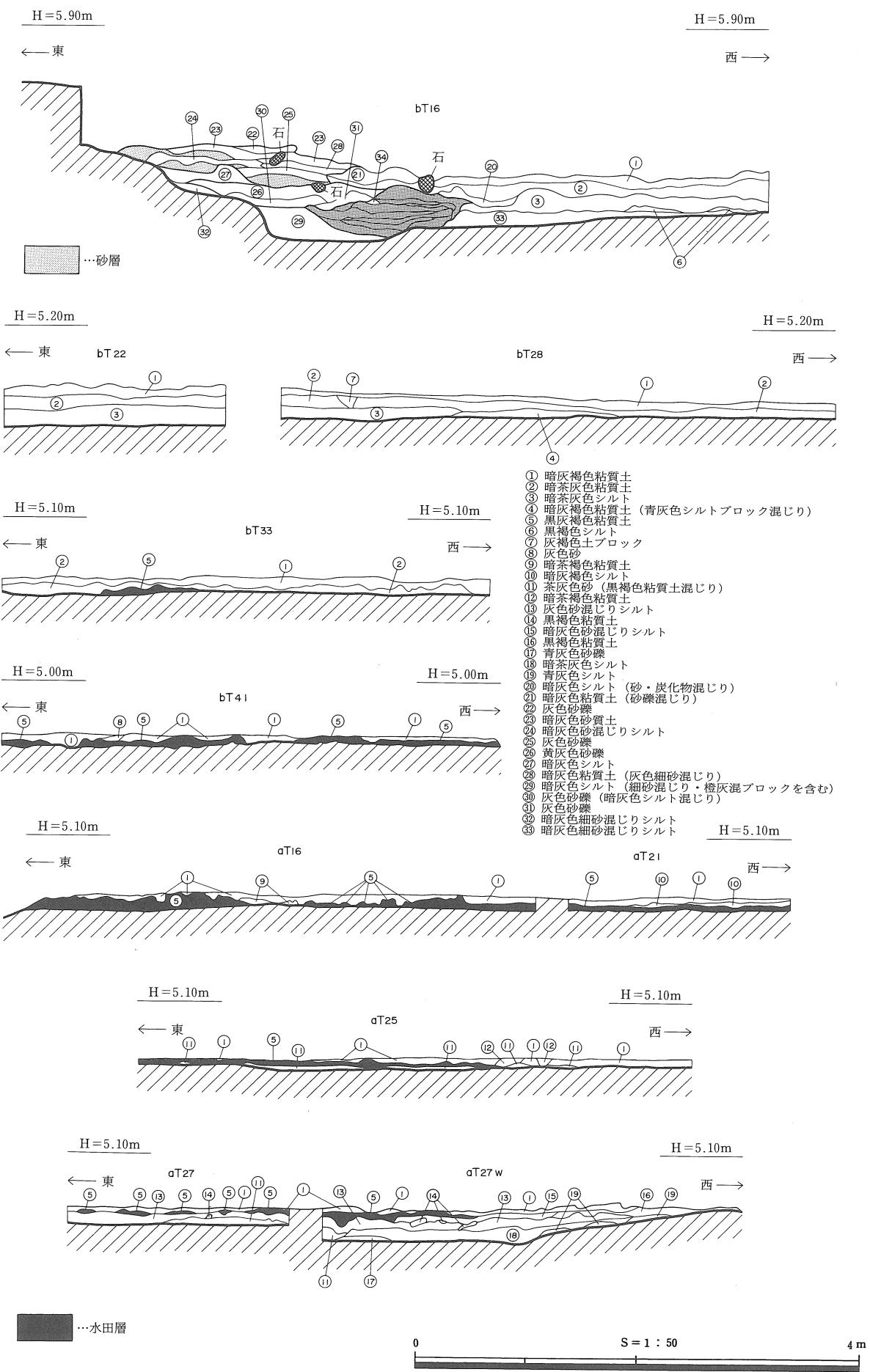
5 遺物の出土状況 (第300図・写真図版62、63)

本調査は、調査地内に2m×5mのトレンチを規則的に設定し、掘り下げることによって行われた。本遺跡は古くから遺物の散布地として知られ、事前の試掘調査においても数多くの遺物が出土しており、表土中からも、須恵器・土師器を中心とした数多くの遺物が出土した。トレンチ掘り下げの結果、大量の須恵器や土師器等の遺物の出土に伴い、トレンチ内は足の踏み場もないような状態となった。遺物はa・b区で多く出土しており、特にa区西側、b区東側での出土が目立った。このことは遺物の垂直分布において、顕著に表われている。a・b区に比べc・d区では、遺物の出土は少なかった。

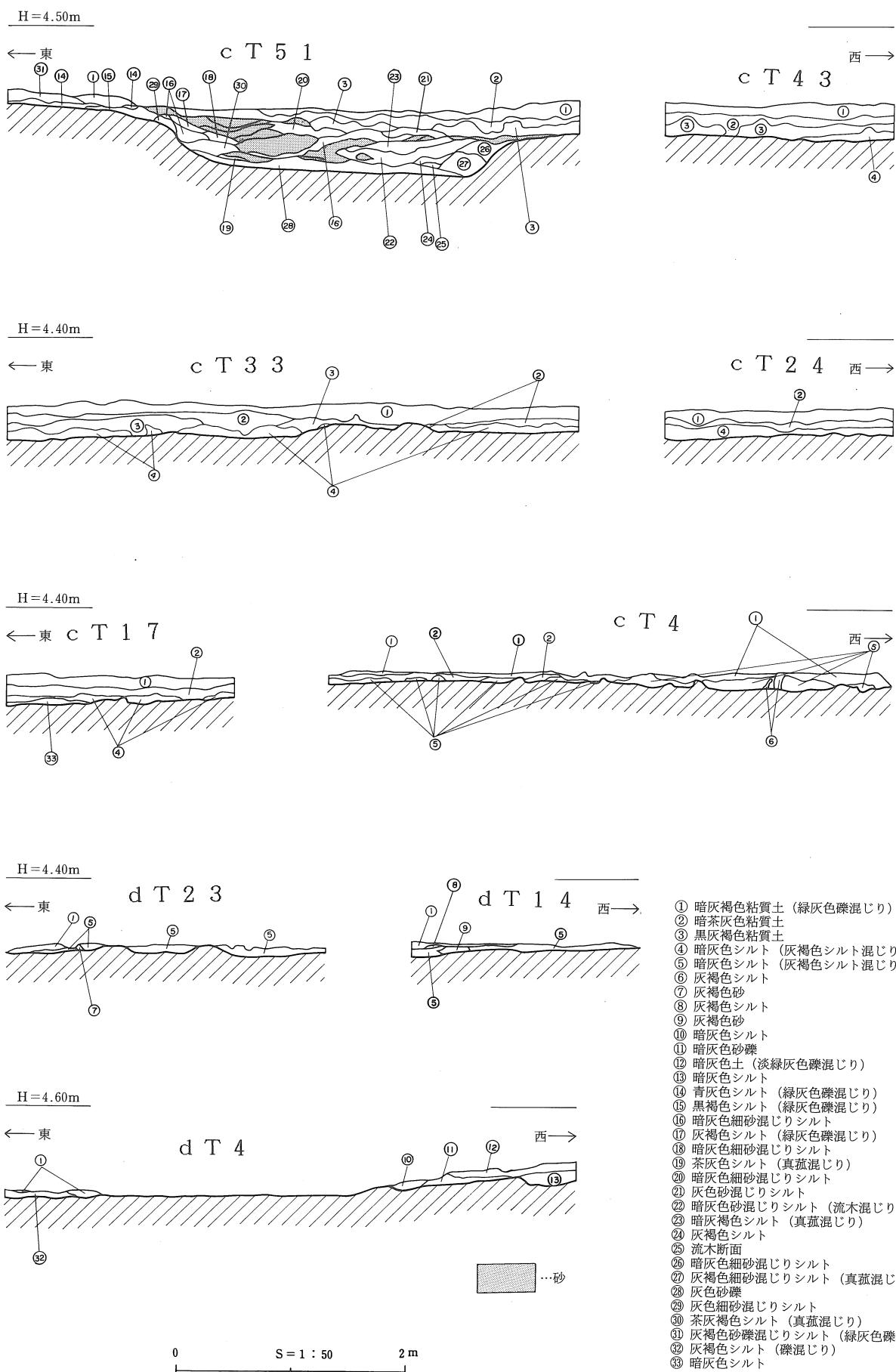
出土遺物の垂直分布状況と陰田小犬田遺跡の地形的条件とを合わせて考察すれば、本遺跡出土の遺物の殆どは、遺跡を挟む両丘陵(荒神谷山・マノカンヤマ)からの流入・転落によるものであることが推測できる。

水田層中(最古の水田層)からは瓦質土器(第317図1137~1140)が出土しており、これらが水田層の出土遺物中で最も新しい遺物であることから、水田層形成時期を中世以降と決定した。水田層より上の層は必然的に中世以降の堆積層と考えられるが、これらの層からも須恵器や土師器が大量に出土している。これは中世以降も周辺からの遺物の流入が続いたからと考えられる。中近世の遺物の垂直分布図を見ると、a区西側から東に行くにつれ出土密度が小さくなっている、b区においては殆ど出土が見られない。c・d区においても、中近世の遺物は殆ど出土しなかった。陰田荒神谷遺跡からは中世以降のテラス状遺構1基が検出されており、本遺跡で出土した中近世の遺物はこの遺構方面からの流れ込みの可能性が強い。

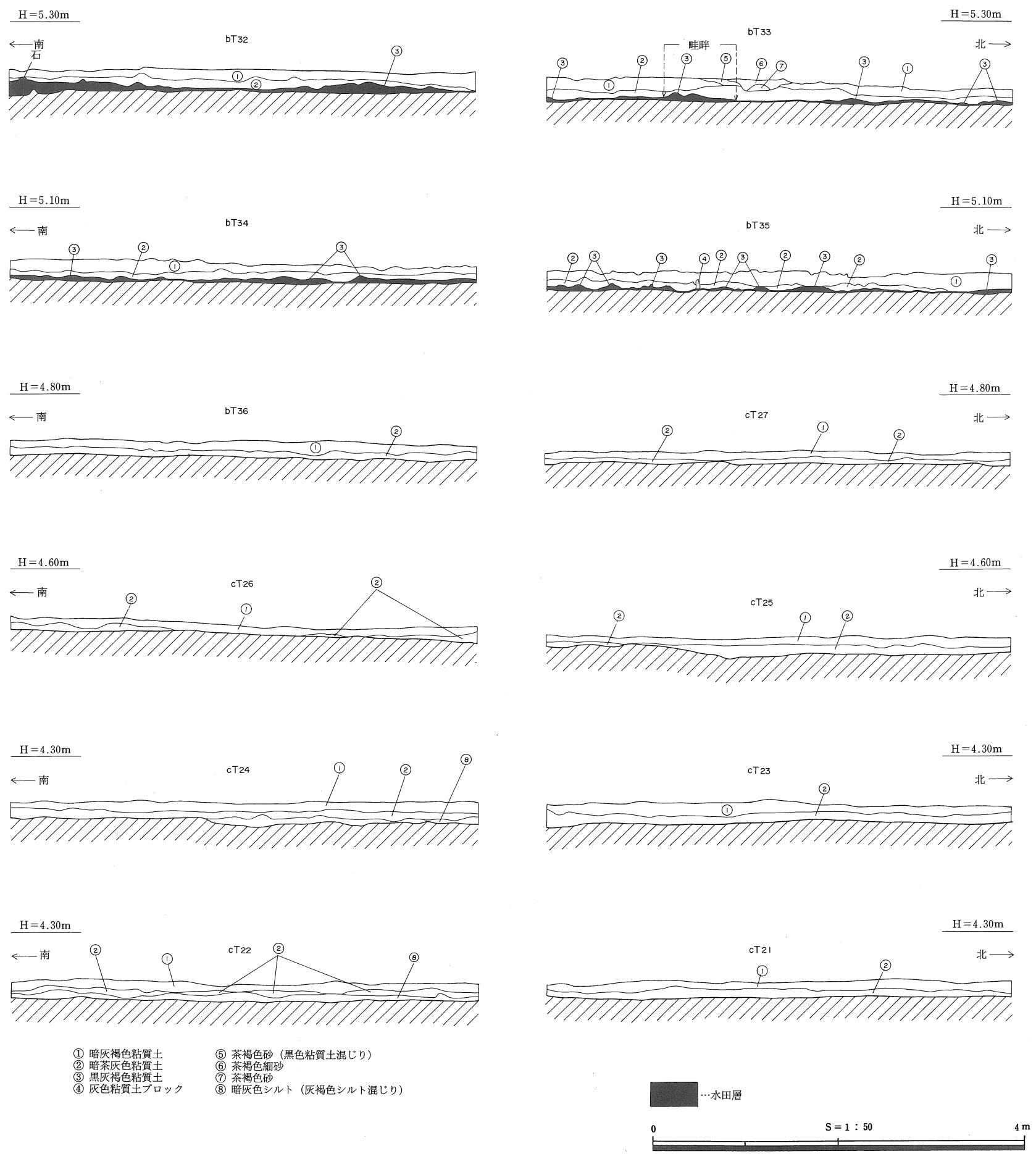
本遺跡において最も多くの遺物を包含していたのはSD-3である。SD-3は自然河川跡であり、出土した遺物は、上流からの流れ込みか、丘陵からの転落物であると考えられる。特に、出土した土師器の表面を見ると



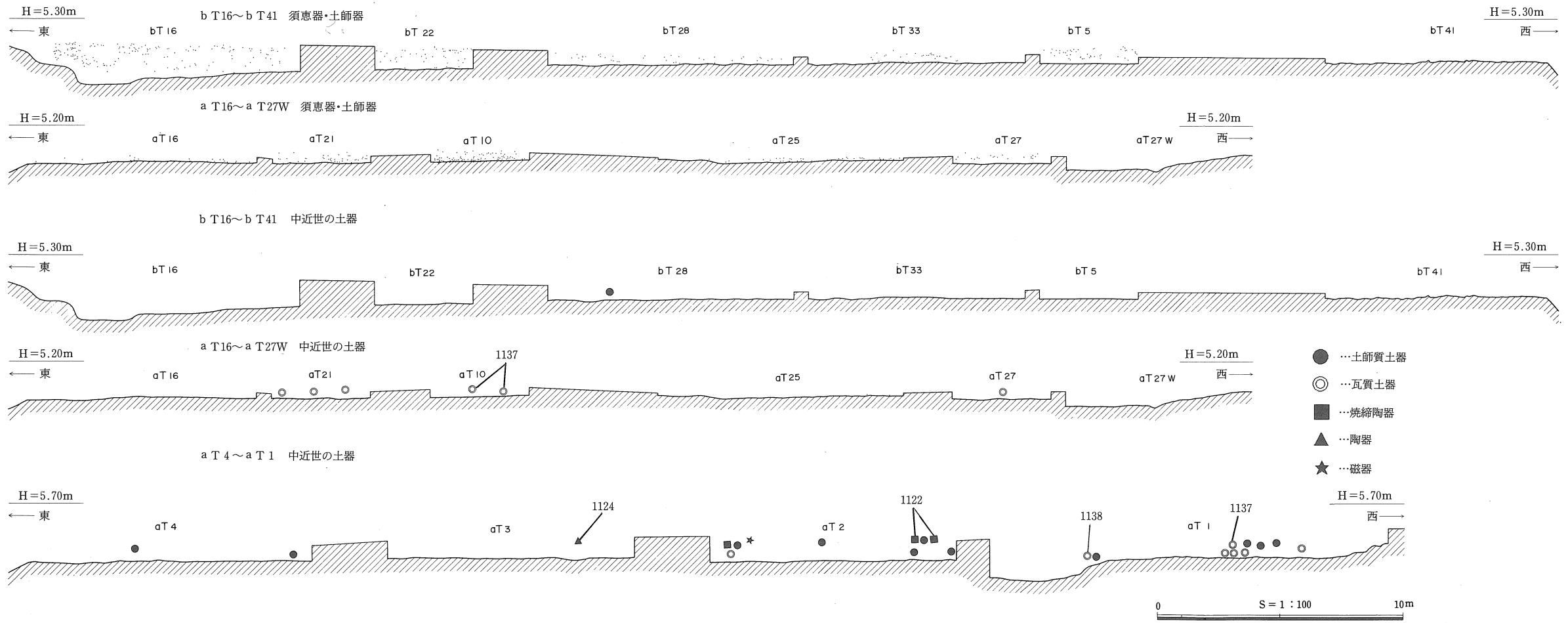
第297図 a、b 区断面実測図



第298図 C・D区トレーンチ断面実測図



第299図 b、c 区トレンチ断面実測図



第300図 遺物出土状況断面実測図

ローリングを受けた形跡があまり見られず、また、須恵器磈（第305図963）のように完形に近い状況で出土した遺物や、破片をつなぎ合わせるとほぼ完形に復元できる土器も出土しており、これらの遺物は上流から運ばれてきたというより、丘陵からの転落物である可能性が高い。さらに、土馬や火鑽臼といった祭祀遺物が出土している点から、転落以外に上方の遺跡からの意図的な投げ捨てが考えられる。また、SD-3からは漆付着土器、須恵器系土師器（P. 参照）、製塩土器が出土している。これらの土器は、陰田ヒチリザコ遺跡か、その周辺部からの転落物であると推測できる。またa・b区からは、古墳時代後期～奈良時代の墨書土器や円面硯が出土している。これらもまた、両遺跡からの転落物として考えられる。

6 出土遺物（第301～331図・写真図版87～91）

・縄文土器（第301図・写真図版87）

903～908、914は、北白川下層II式相当と思われ、縄文時代前期中葉に位置付けられる（註2）。903～907は縄文を施すもので、905は内面を条痕調整するものである。908は、爪形文である。914は、外面ハケ調整の上げ底の底部である。909、910、912、918は、福田K II式相当と思われ、後期前葉に位置付けられる。912は内面ミガキ調整である。918は、刺突を有する貼付突起である。913は粗製の無文の深鉢、915～917は底部である。

・弥生土器（第302図・写真図版87）

919、920は、弥生時代中期前葉に比定される甕である。櫛描平行線が施され、920はその下位に刺突文がめぐる。919は、口縁端部を逆L字状に外反させており、底部外面はミガキ調整されている。921～924は中期中葉に比定される。921は、無頸壺である。922～924は、頸部に指頭圧痕文帯を貼り付ける甕で、922、923は口縁部に凹線文を施している。923、924は刻み目を施している。922、923は口縁部の拡張がくり上げ気味である。925～928は弥生時代後期後半に比定される甕である。925は、口縁部に4条のヘラ描き沈線を施すもので、肩部に刺突文がめぐる。926、927は口縁部に平行沈線がめぐり、926は頸部に押引き状の波状文を施している。929は、口縁部素縁の小型の壺で、把手の痕跡が観察される。930～932は平底の底部で、930の外面はミガキ調整されている。932は穿孔がみられ、甌と思われる。

・土師器（第303、309図）

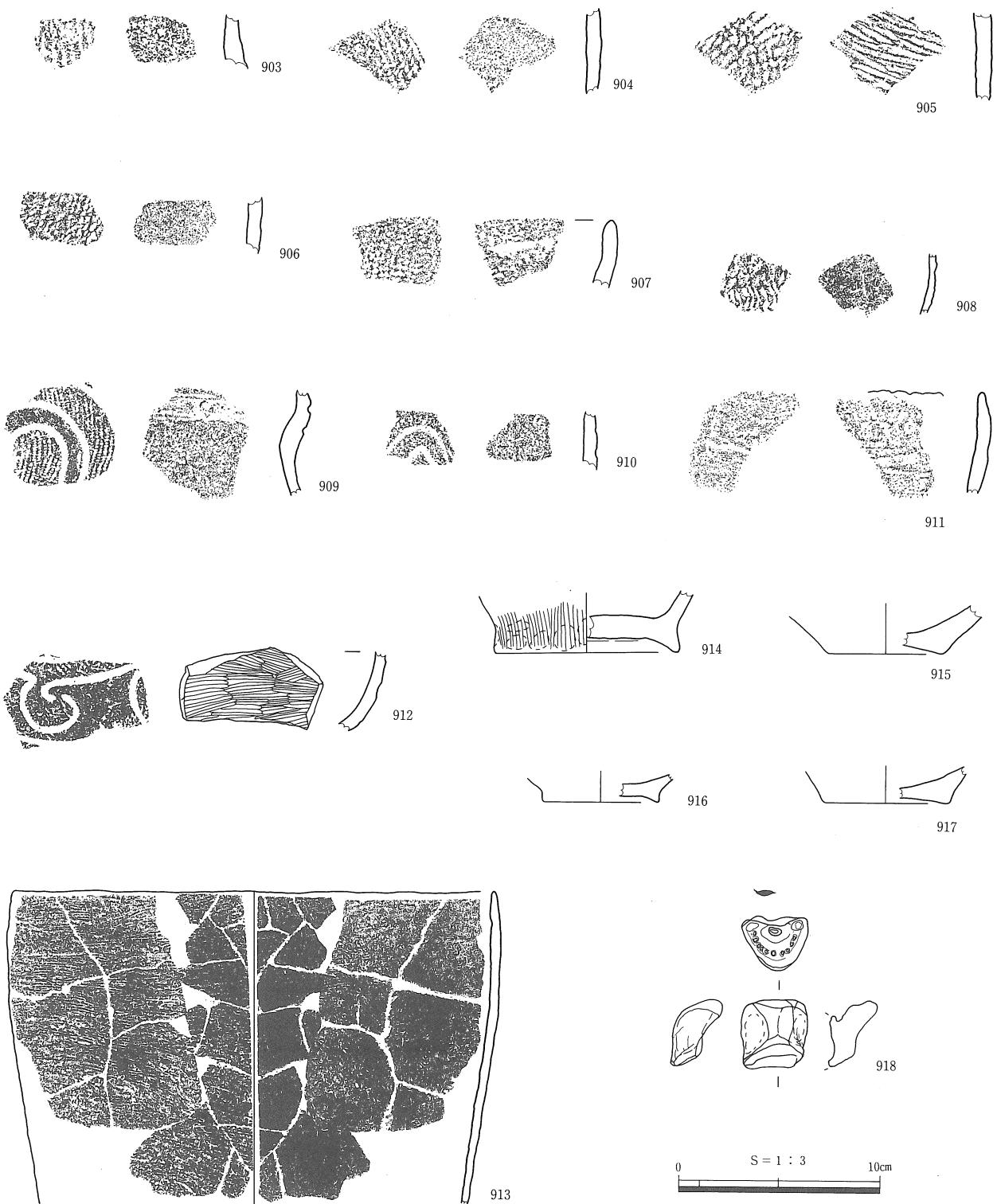
933～940は、古墳時代前期前半の土器である。933～935は壺で、933は頸部に刺突文がめぐり、935は突帯を貼り付け、肩部に羽状の刺突文を施している。936、937は、甕である。938は鉢、939は低脚壺の脚である。940は、高脚の脚である。1014～1017は、古墳時代後期以降の甕である。1018～1228は、奈良時代の土器である。1018、1019は把手付きの壺または甕である。1018は内外面、1019は外面ハケ調整で、1019は外面が丹塗りされている。1020から1025は壺で、高台が付く。うち、1020～1023は丹塗りされている。1022には、螺旋状暗文が確認できる。1026～1028は丹塗りの皿である。

・須恵器（第304～305図・図版87）

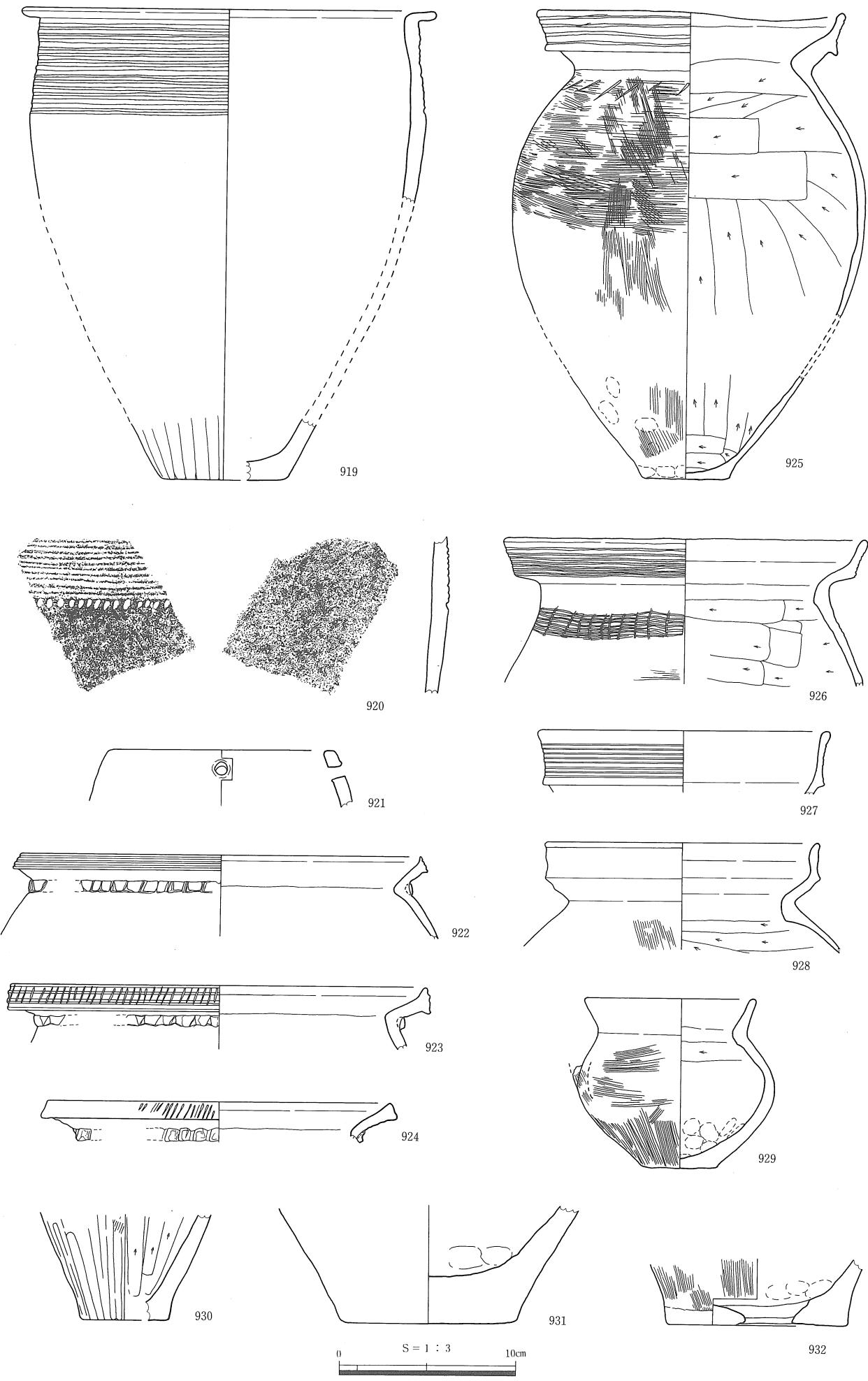
942、943は陰田編年（註3）の4式（6世紀後葉）の壺、957は4式の台付椀の脚台、963は4式の磈、944、945は5式（6世紀末～7世紀初頭）の壺、956は6式（7世紀前葉）の高壺、959は6式の直口壺、941、948は7式（7世紀中葉）の蓋、946、947は7式の壺、958は7式の磈、950は8式（7世紀後葉）の蓋、949は9式（7世紀末～8世紀前半）の蓋、951～955は10式（8世紀後半）の糸切り技法の壺である。960～962は平安時代の壺と思われ、961、962は有耳壺の耳部である。11世紀代に比定される（註4）。964～970は時期不詳である。964、966は内面放射状タタキ、965は内面車輪状タタキの甕である。969は大型の甕の口頸部である。968は内面放射状タタキの有耳壺である。967は甌と思われ、素縁の口縁部が若干外反する。外面は口縁下の1条の沈線以下に平行タタキ、内面は同心円タタキで口縁部付近をナデ消している。970は把手で、外面に平行タタキがみられる。

・文字関係遺物（第306、307図・写真図版88）

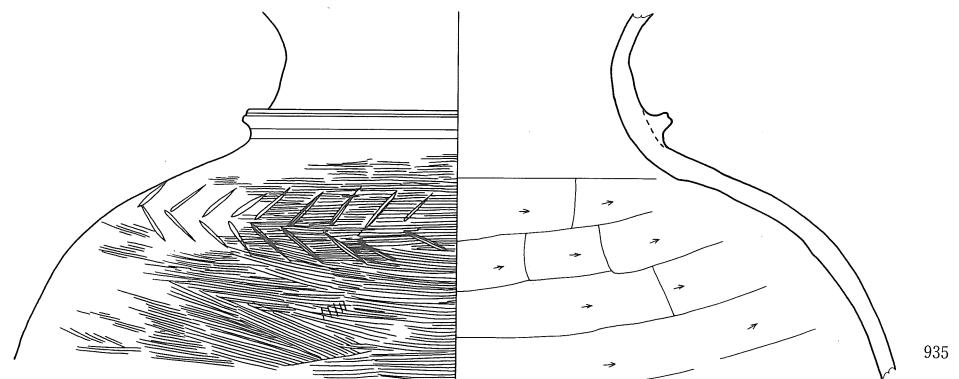
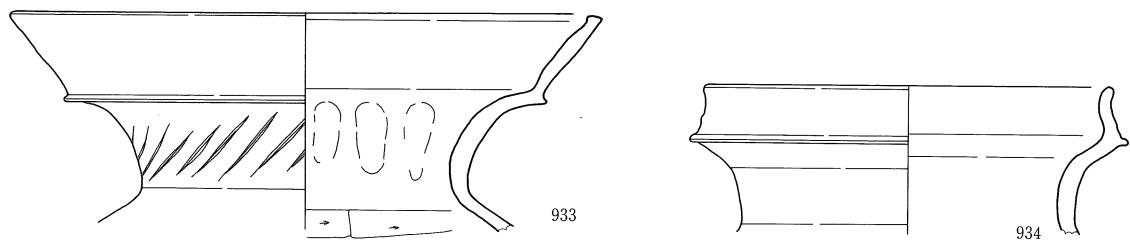
墨書土器（971～978）、木簡（987）、円面硯（979、980）が出土している。墨書土器は、いずれも陰田編年の



第301図 遺構外出土遺物(縄文土器)実測図(1)

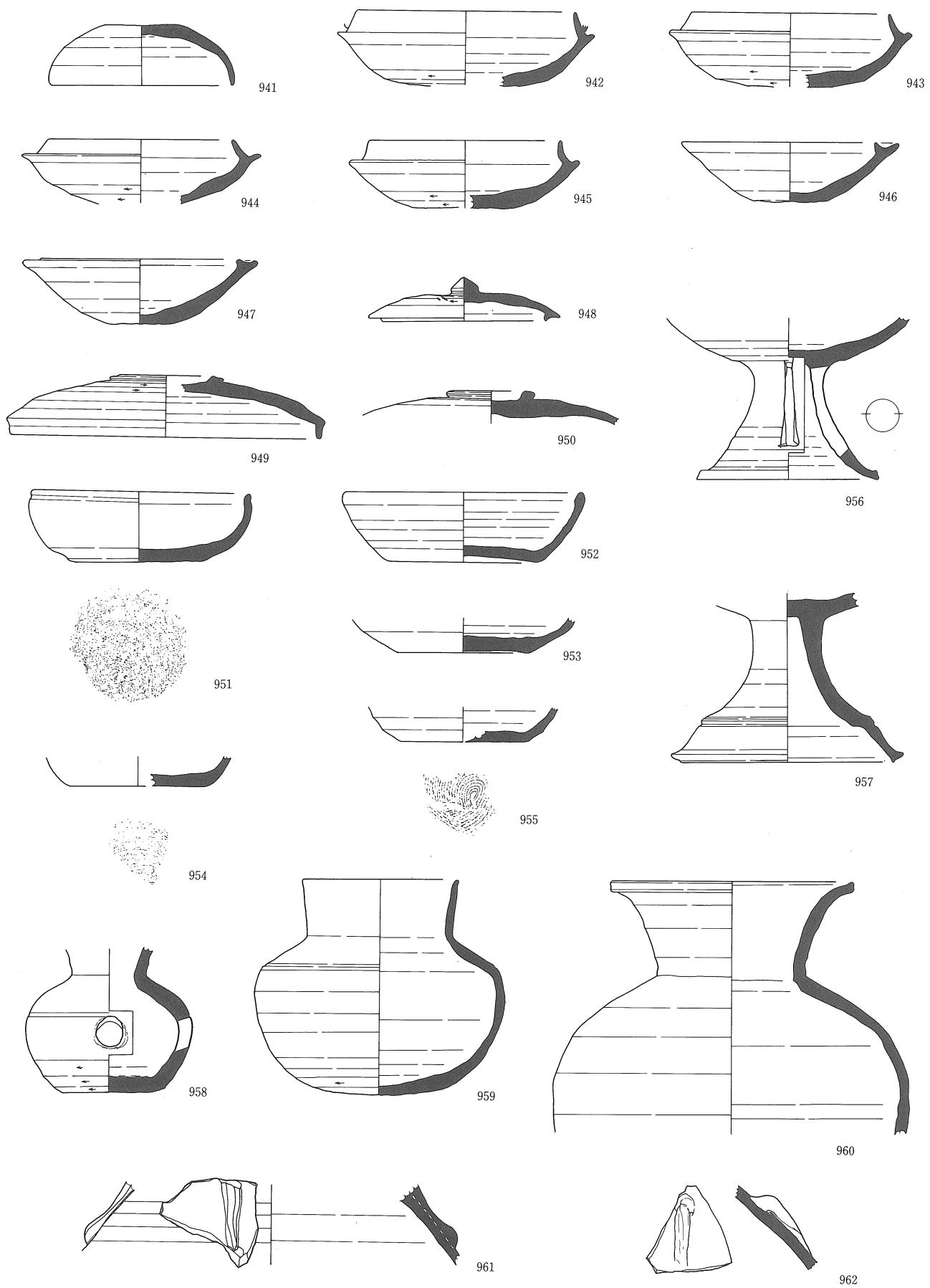


第302図 遺構外出土遺物(弥生土器)実測図(2)

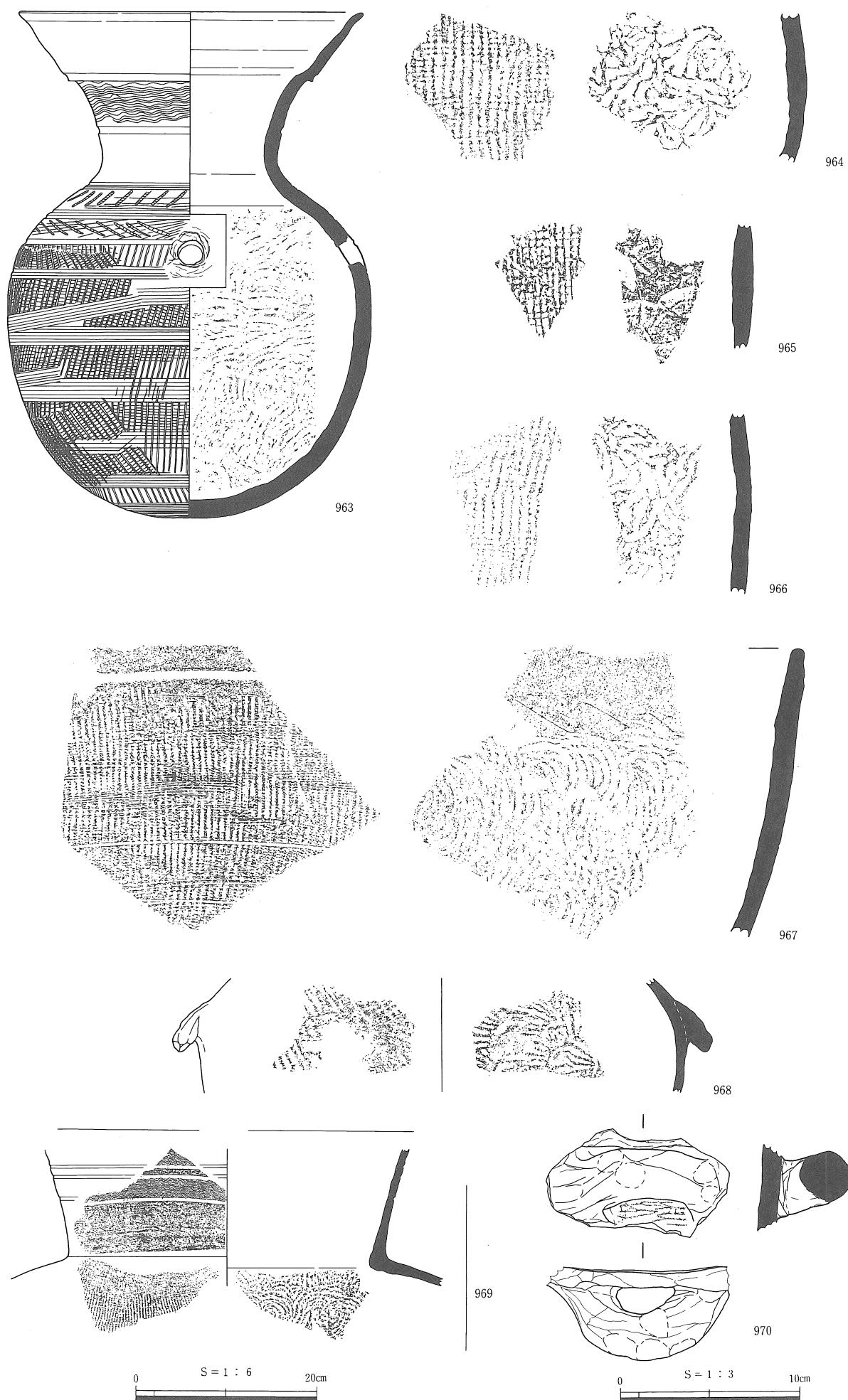


0 S = 1 : 3 10cm

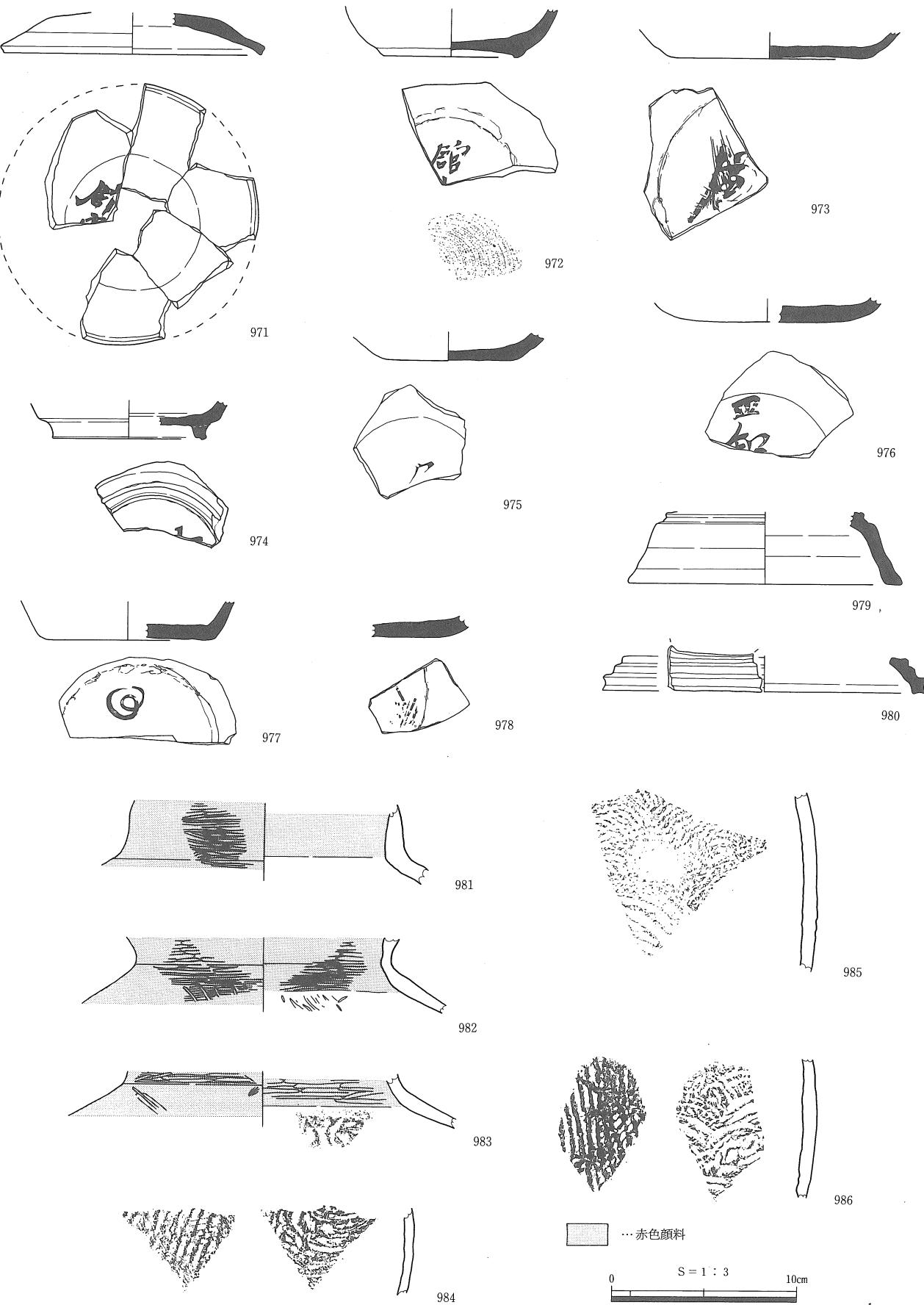
第303図 遺構外出土遺物(土師器)実測図(3)



第304図 遺構外出土遺物(須恵器)実測図(4)



第305図 遺構外出土遺物(須恵器)実測図(5)



第306図 遺構外出土遺物(墨書土器・円面硯・土師器)実測図(6)

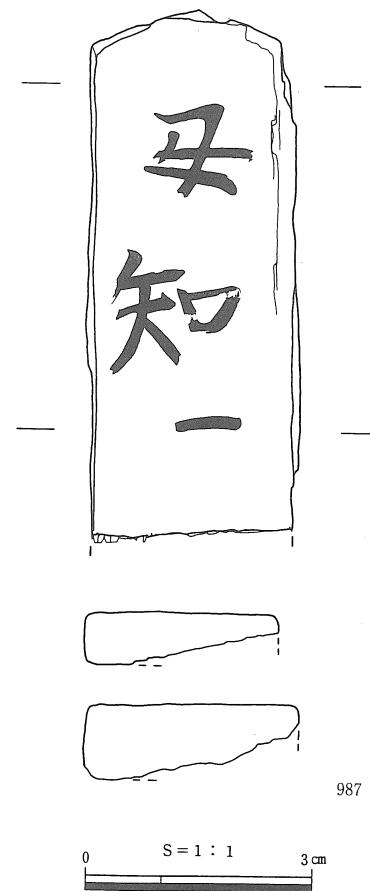
10式（8世紀後半）に相当する須恵器である。971は、蓋の天井部内面に「館□」と読める。□はウ冠を戴く文字のようである。972は、糸切り底の底部に「館□」と読める。□はウ冠の上の点か。973は、糸切り底の底部に「舍」と読める。「館」の偏にあたるものと思われる。974は高台付き壺の底部に墨書を認めるが、読みは不明である。975は壺の底部に墨書が認められる。972の「館」との比較で、「舍」の上にかかる部位に相当するものと考える。976は、壺の底部に「田知」（註5）と読める。977は、壺の底部に螺旋状の記号的な墨書が認められる。978は、壺の底部に墨書が認められるが、読みは不明である。987は、木簡である。左右側面は原形をとどめるものの、下側は二次的な切断を受けており、上側小口面はやや腐蝕し、破損の有無が判然としない。裏面は剥離している。材の樹種はスギである（註6）。3文字が確認できるが、第2字の「知」のほかは判読し難い。1字目は「母」、「丑」、「多」の可能性がある。「多知」とした場合、これを「たち」と読み、976の「田知」も同様に読めば、「館」の「たち」に通じる読みとなる（註7）。「館」は「館」の俗字とされている文字である。「館」とは、古代において接待、宿泊機能を持つ客舎を意味した。また、官衙に付属する官人の宿舎を「館舎」と称した（註8）。『倭名類聚鈔』には、「館 唐韻云館反作館和名多知 一云無豆知美客舎之也」との記述がある。墨書の文意は、施設名あるいは機関名を示したものではなかろうか。979は、陰田マノカシヤマ遺跡久幸池地区で出土した690（第221図）や陰田マノカンヤマ遺跡堤ノ下地区の705（第229図）と同じタイプの円面硯である。980は、段状の凹線がめぐり、透かしのはいる円面硯の脚台である。（註9）

・須恵器系土師器（第306、309図・写真図版87、90）

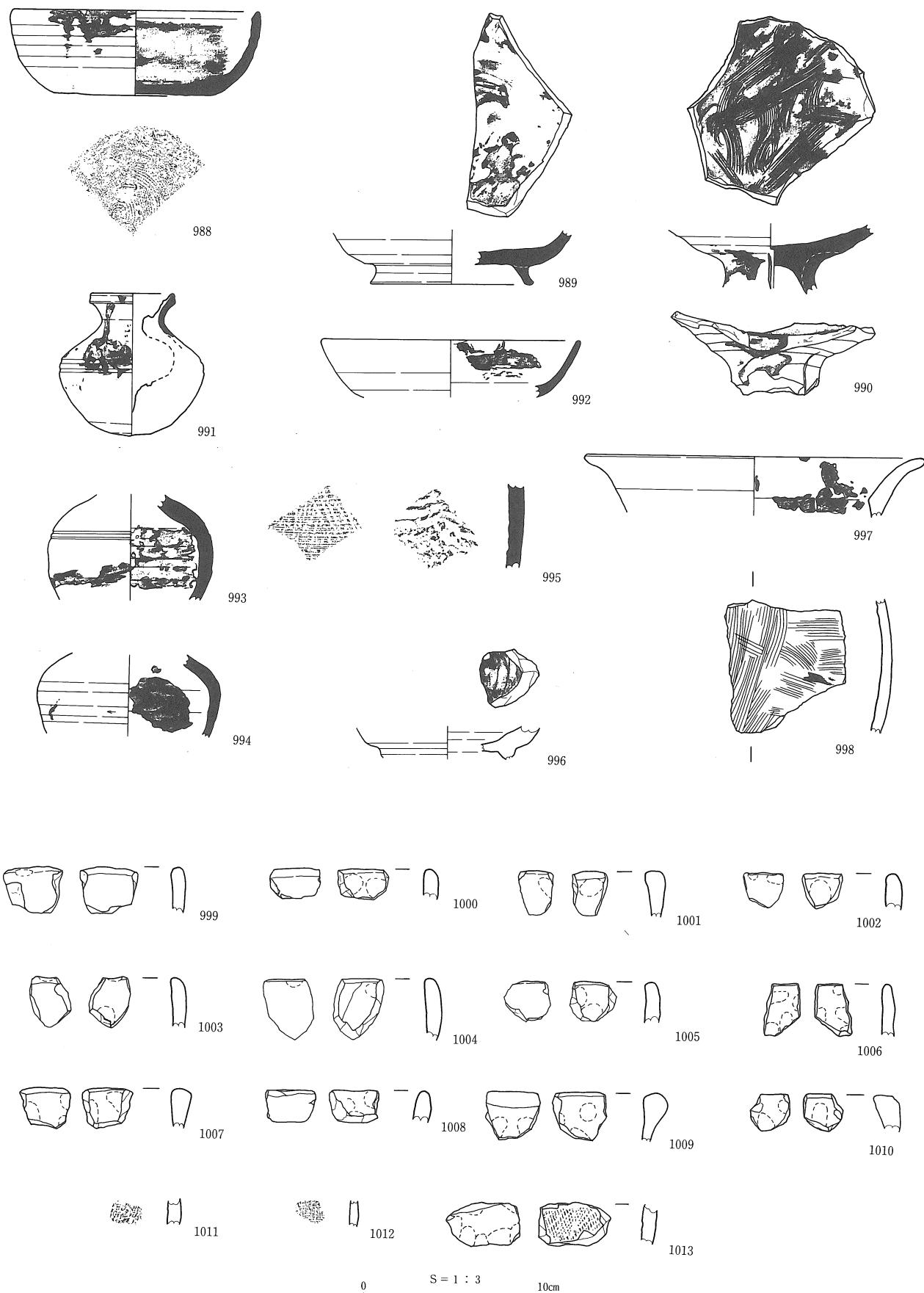
ここでは、須恵器の製作技法に由来する製法で製作された土師器を指す。981～986は、胴部外面に平行タタキ、内面に同心円タタキが施される、須恵器と同様な叩き道具を用いるものである。完形品ではなく、頸部と胴部の破片のみの出土であるが、壺状の器形が推定される。頸部の内外面はミガキ調整されており、外面と口頸部内面を丹塗りしている。胎土分析の結果では、大井窯産と推定されている（註10・NO.29資料）。島根県邑智郡大和村所在郷上遺跡や同県同郡瑞穂町所在野田西遺跡など、近年島根県石見地方において、内外面の整形痕が須恵器の甕と同様である土師器の甕の出土例が知られる。これらは、煎熬過程で使用した製塩土器とみられている（註11）が、器形や丹塗りなどの相違点があり、直接的に当遺跡例と関連付けるには、現段階では早計であろう。1029～1034は、「回転台土師器」等とよばれるものである。形態的には須恵器だが、色調はくすんだ橙色を呈し、酸化焰焼成である。胎土は緻密で、焼成は硬質である。1029～1031、1033は壺、1032は高台付きの皿、1034は脚の端部である。

・漆付着土器（第308図・写真図版66、89）（註12）

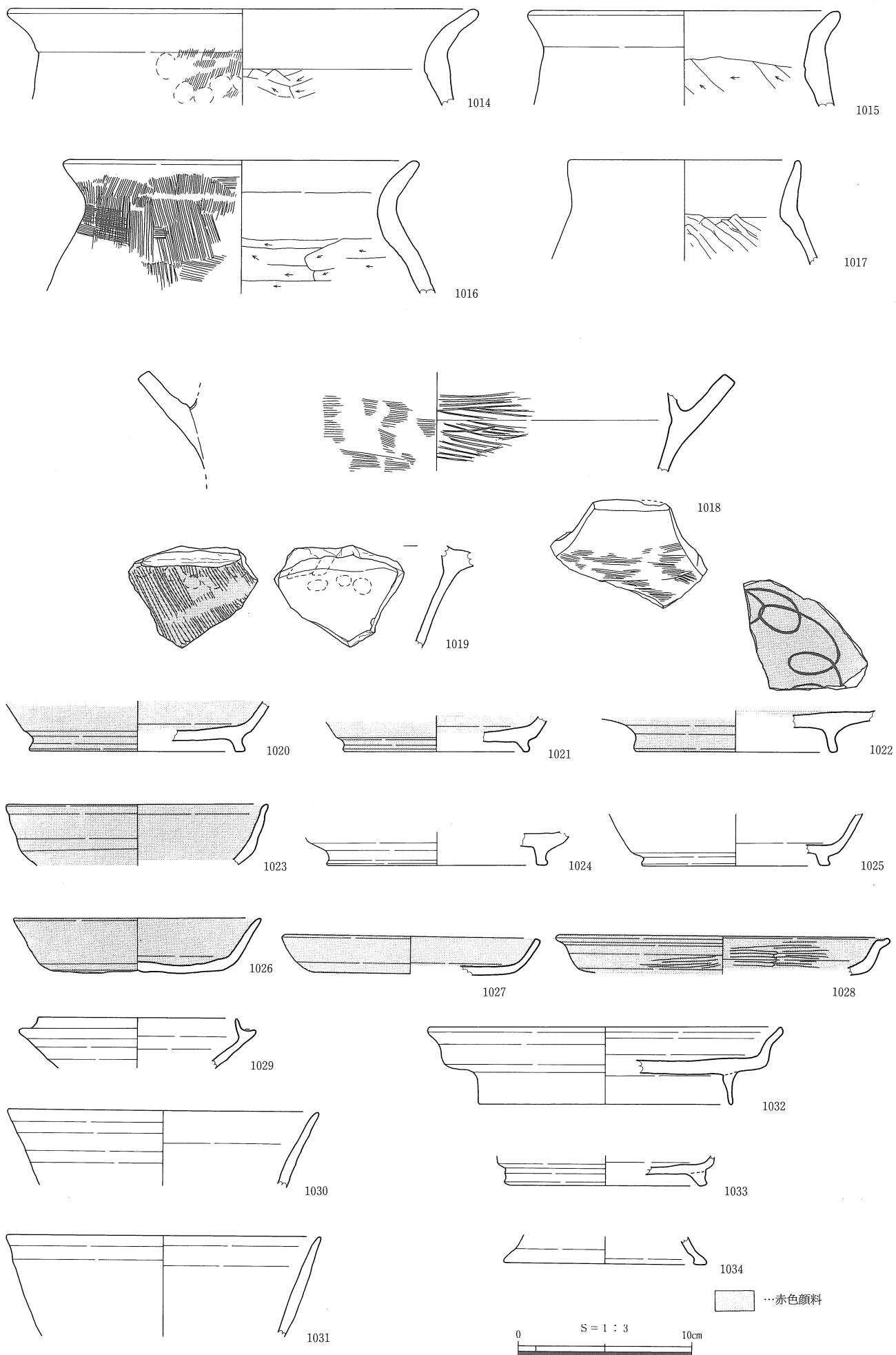
988～998は、漆の付着した土器である。988は糸切りが認められる須恵器の壺で、内面全体と口縁部外面に付着し、漆の滴りが一部底部にまで至っている。989は須恵器の高台付き壺で、内面と破損断面の一部に付着している。990は線状の透かしのある須恵器の高壺で、壺部内面全体に付着し、破損断面を滴って脚部外面に流れている。内面に刷毛を使用した軌跡が観察できる。991は須恵器の小壺で、内部で漆が固形化し、漆塊となっている。内面は全て漆が付着しており、口縁端部から滴っている。992は須恵器の高壺の壺部で、内面と破碎断面に付着している。993、994は須恵器の小壺で、甕の可能性もある。993は内外面と破碎断面、994は内外面に付着している。995は須恵器の甕の胴部片で、内面の同心円タタキの上に付着している。996は土師器の高台付き壺で、



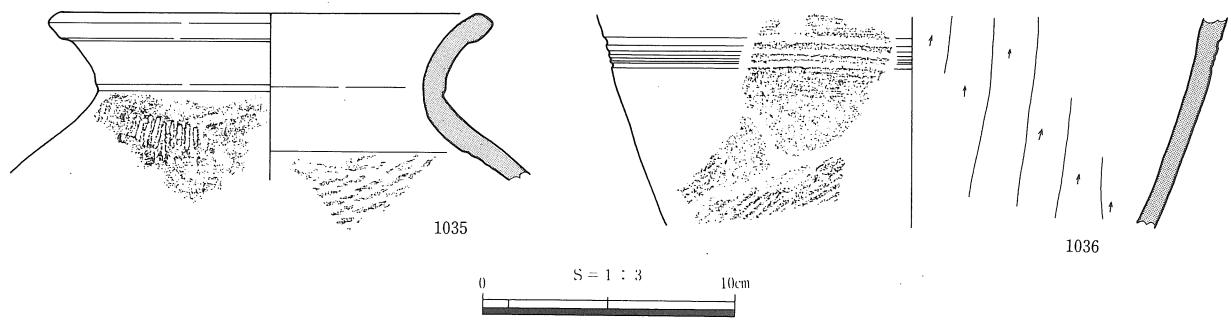
第307図 遺構外出土遺物(木簡)
実測図(7)



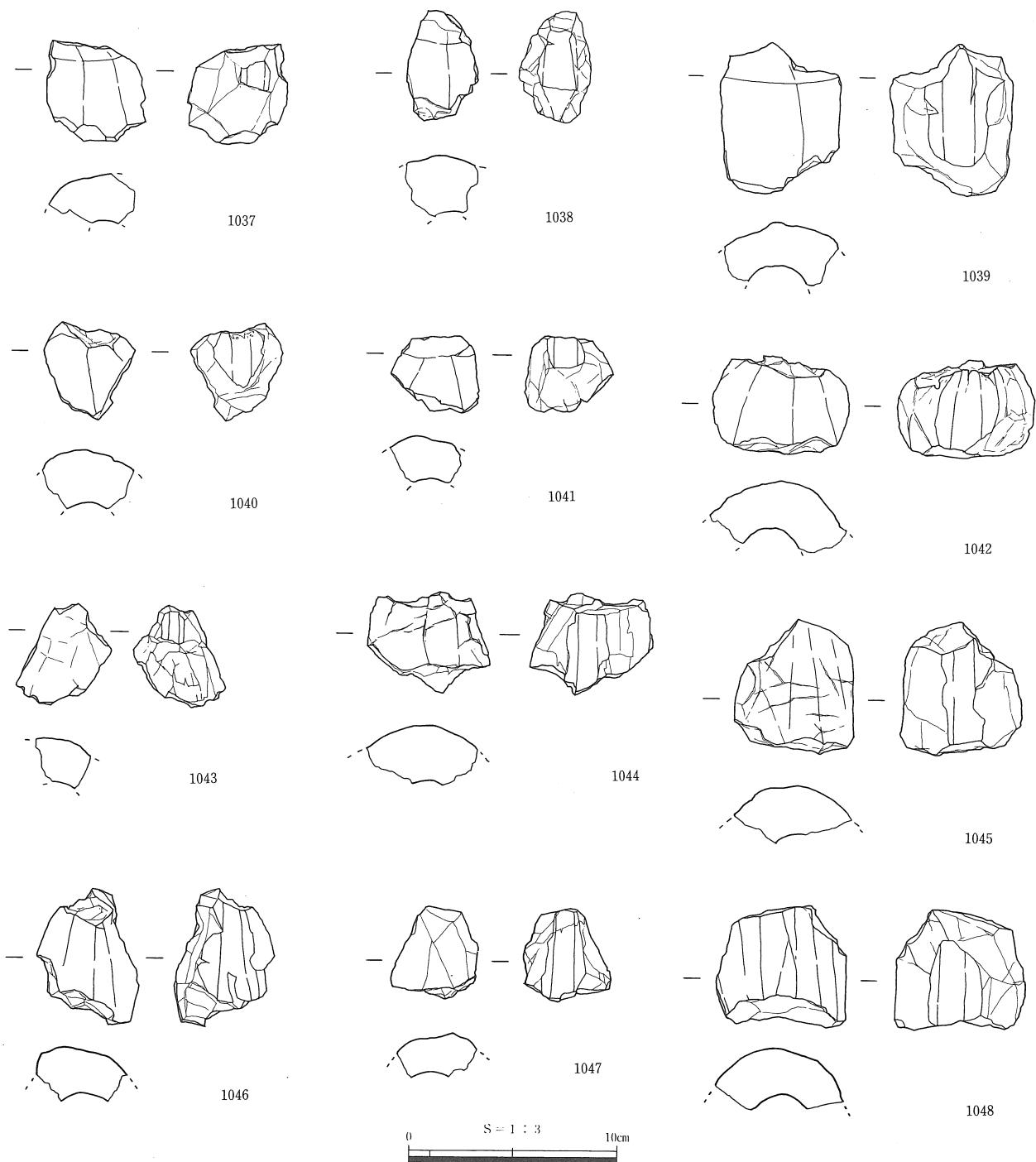
第308図 遺構外出土遺物(漆付着土器・製塙土器)実測図(8)



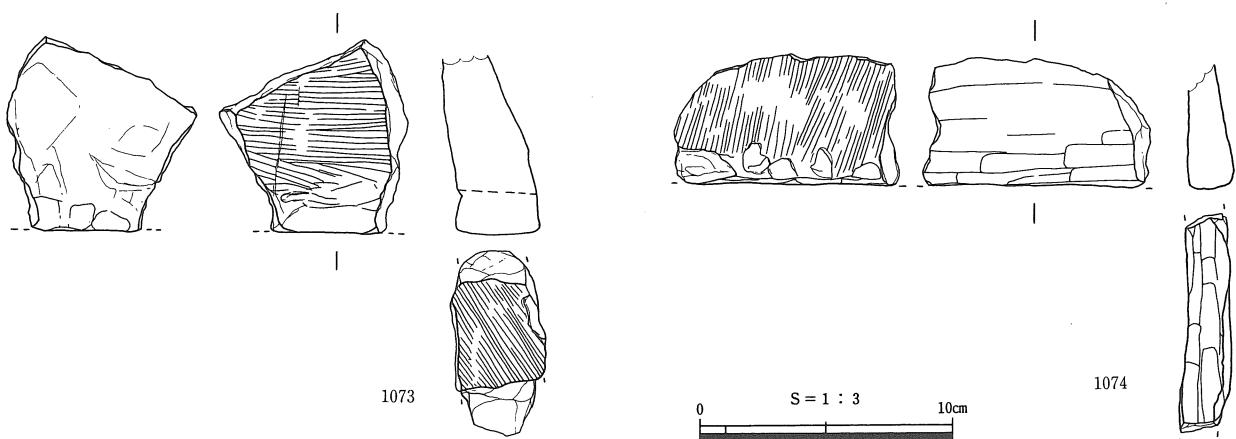
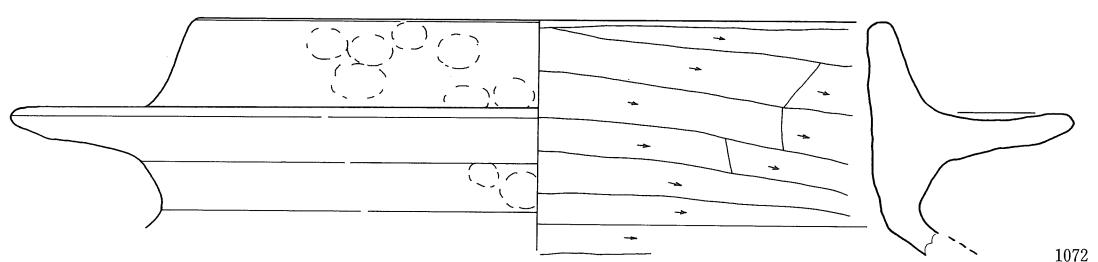
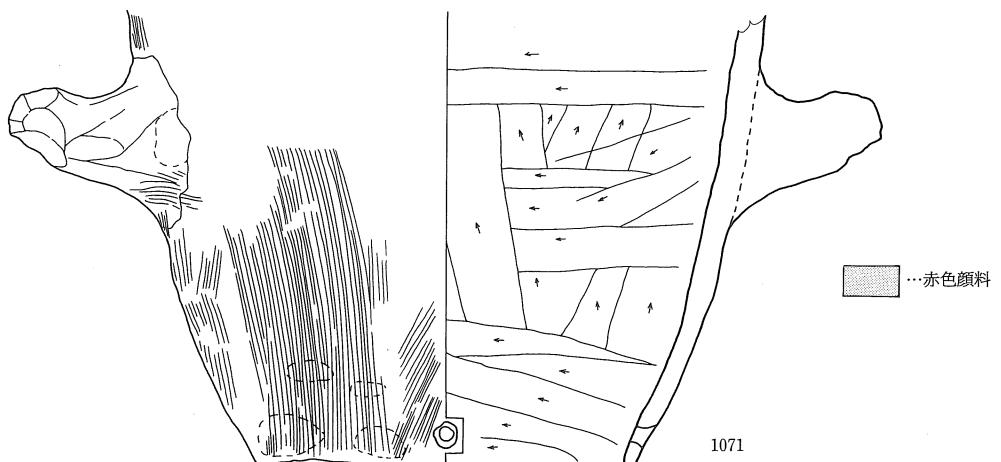
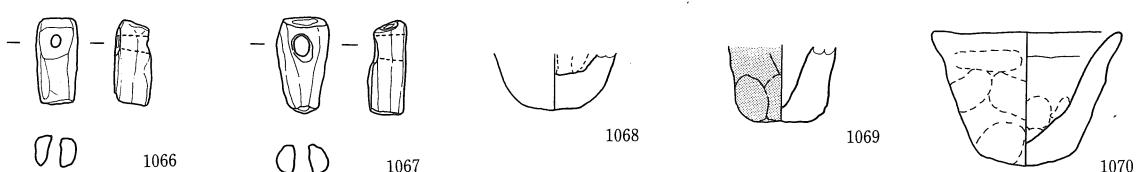
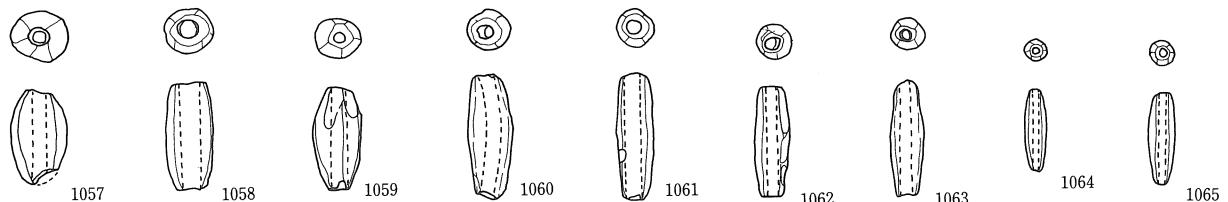
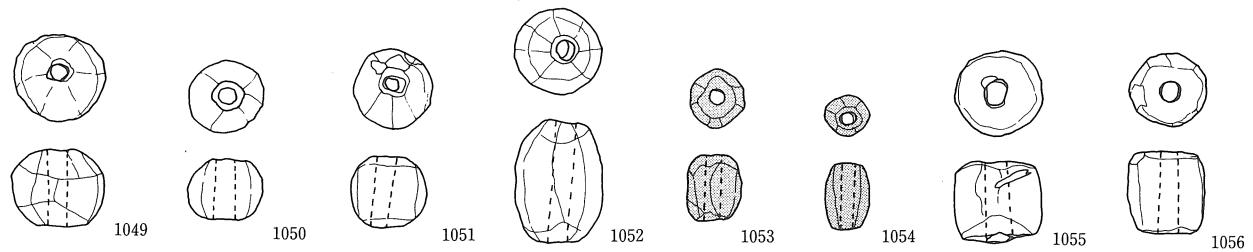
第309図 遺構外出土遺物(土師器)実測図(9)



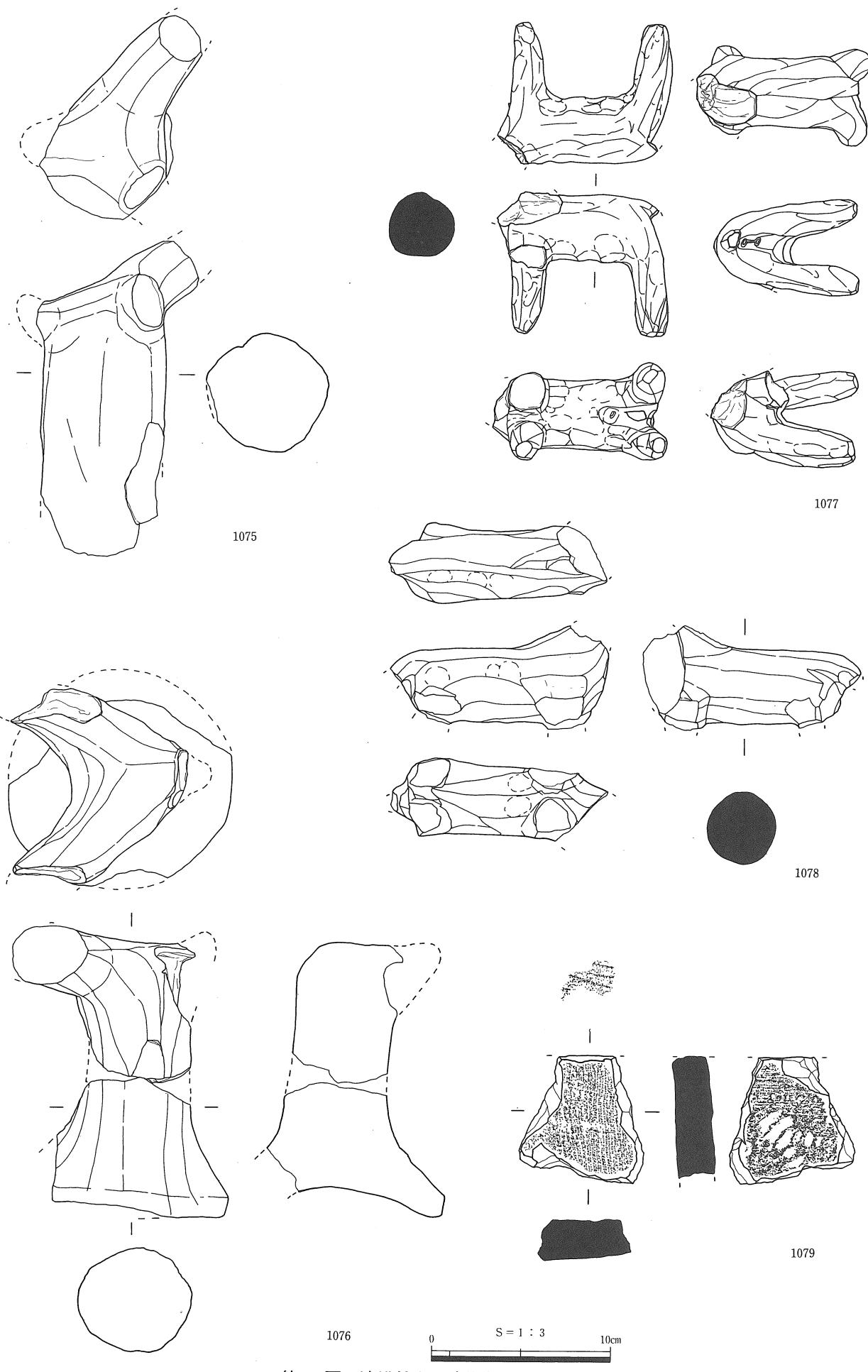
第310図 遺構外出土遺物(瓦質土器)実測図(10)



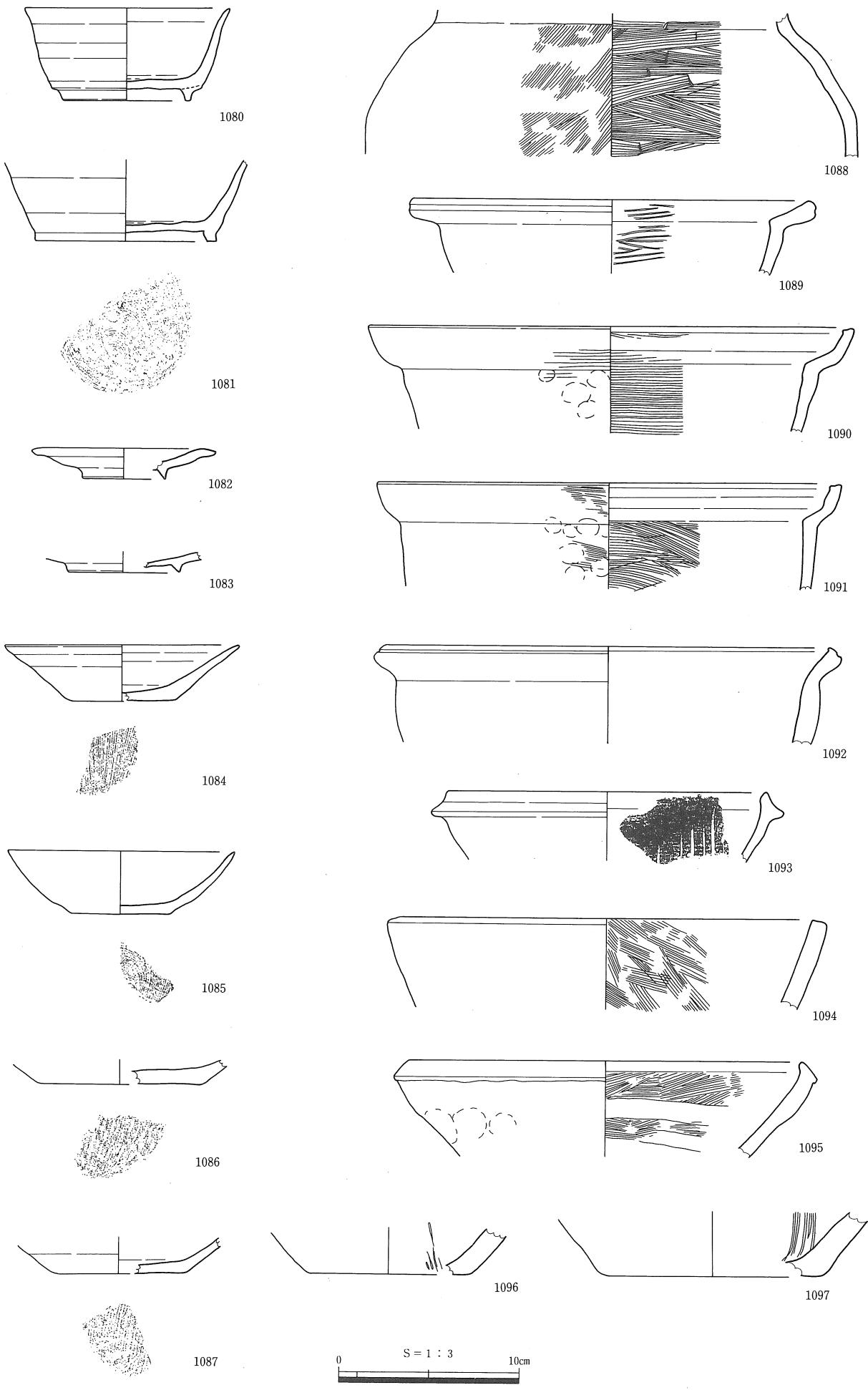
第311図 遺構外出土遺物(轍の羽口)実測図(11)



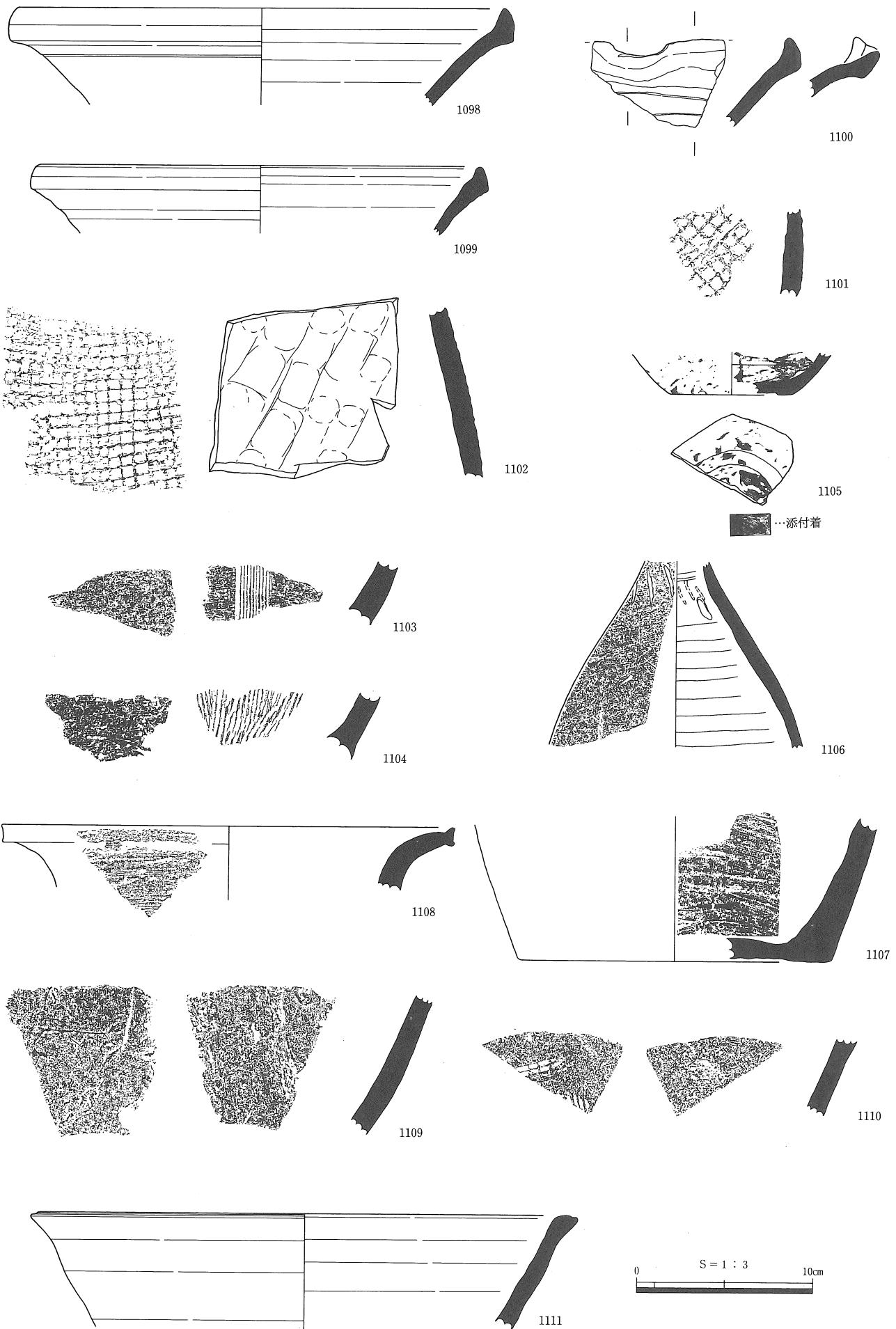
第312図 遺構外出土遺物(土製品)実測図(12)



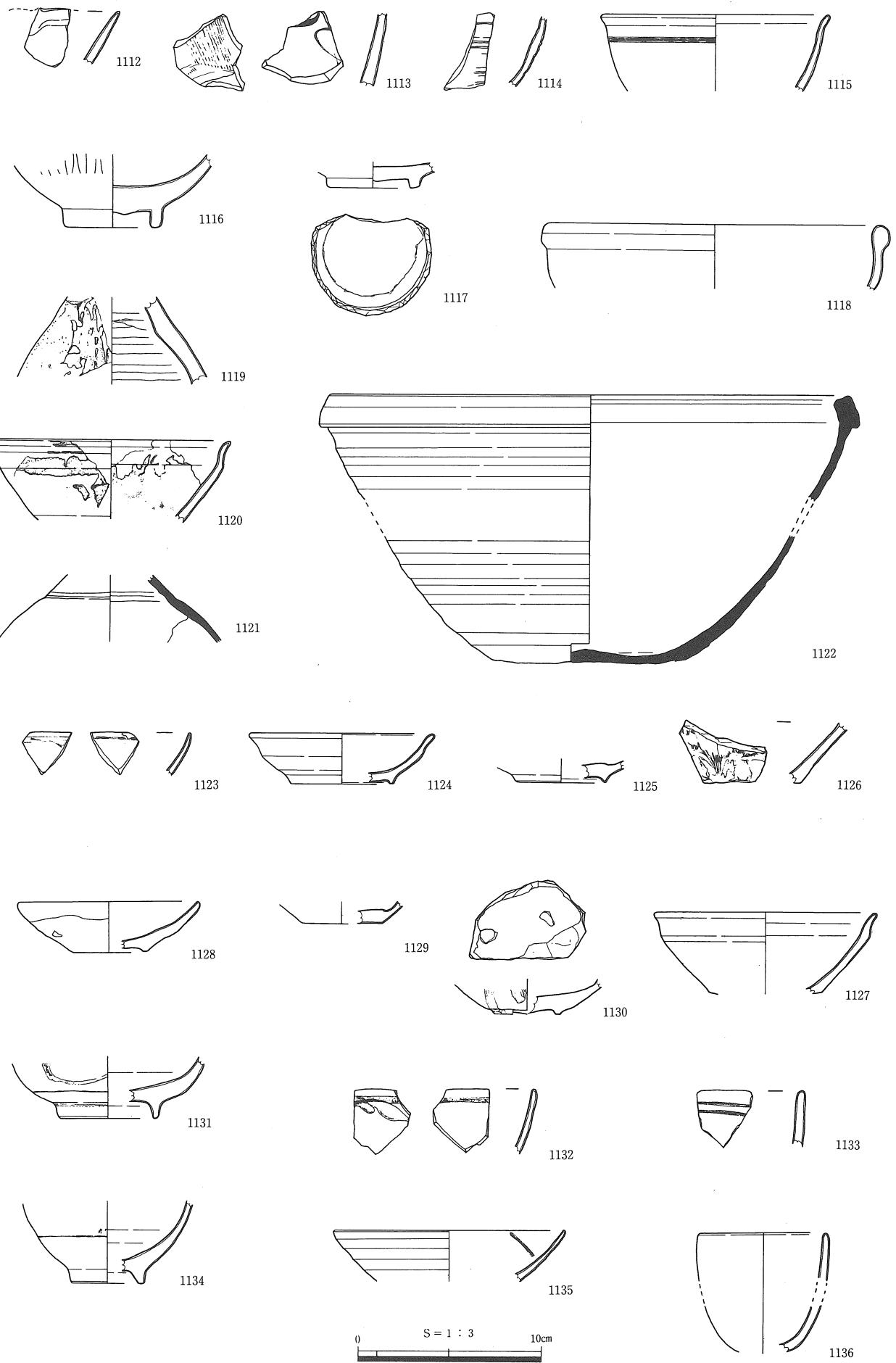
第313図 遺構外出土遺物(土製品)実測図(13)



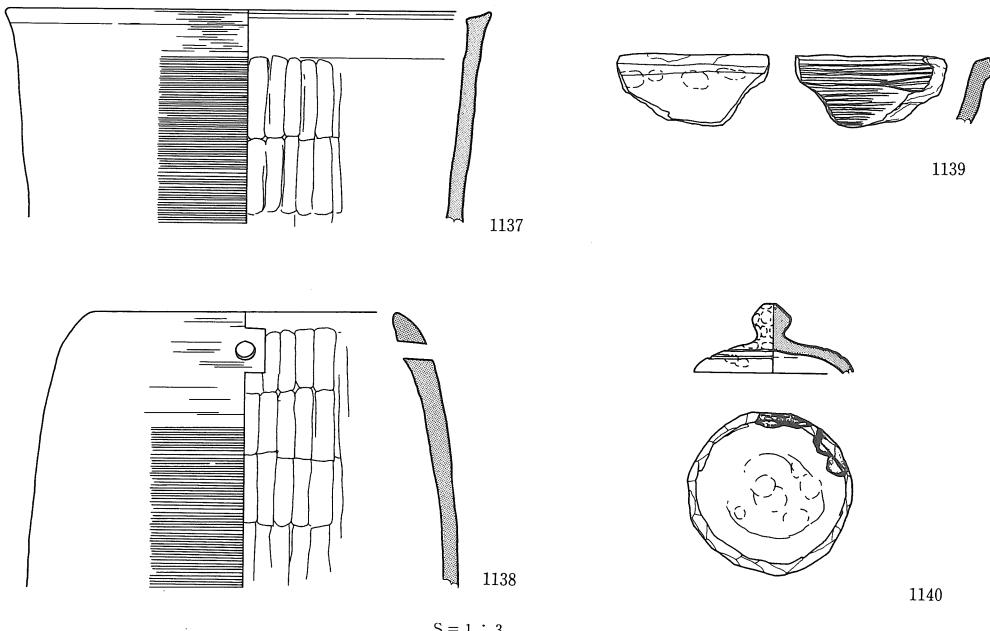
第314図 遺構外出土遺物(土師質土器)(14)



第315図 遺構外出土遺物(須恵質土器、焼締陶器)実測図(15)



第316図 遺構外出土遺物(陶磁器)実測図(16)



第317図 遺構外出土遺物(瓦質土器)実測図(1)

内面に付着している。997は土師器の甕の口縁部で、内面に付着している。漆の滴りが落下して流れた感じである。998は土師器の甕の胴部片で、外面の一部と内面全体に付着しており、凹面をなす内面から溢れて破碎断面に滴っている。全体に潤いのある光沢を放ち、一部に赤橙色を帯びる箇所がある。数本の纖維が、固形化した漆液に混ざった状態で付着しており、刷毛から抜けた毛と思われる。

漆の付着状況は、破損した土器をパレットとして2次使用していることを示している。よって、土器の時期は必ずしも漆塗り用パレットの時期を示すものではない。出土した木製品中にも、漆の付着した皿状容器(第324図1187)がある(註13)。また、籠状の木器(第324図1190、1191)や多量の曲物の底板(第329、330図1220~1229)の出土をみたが、漆工との直接的な関係を見出すことはできなかった。

・製塩土器(第308図・写真図版90)

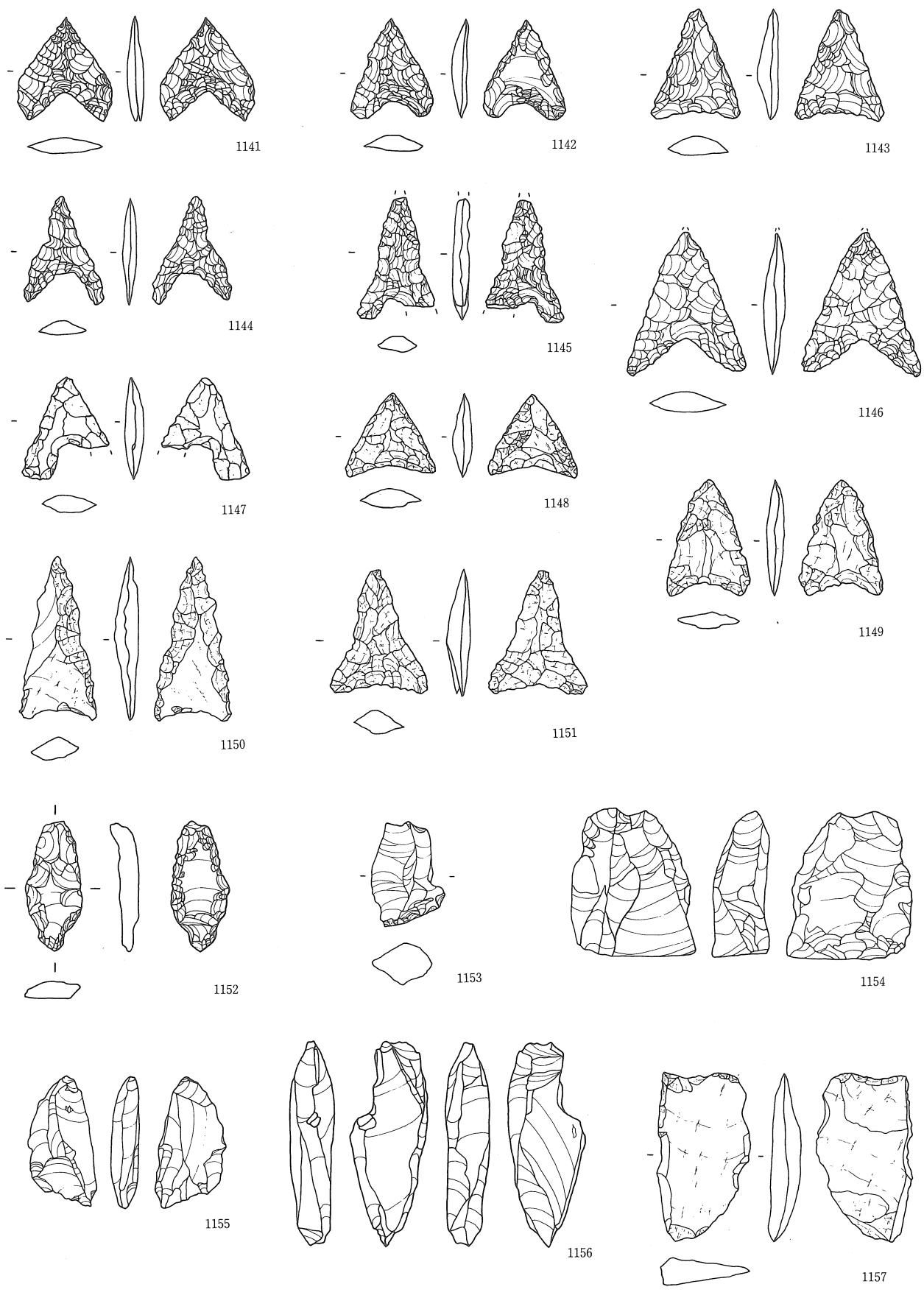
999~1013は製塩土器で、六連島式と呼ばれるものである。いずれも手捏品であり、999~1010は、やや内湾気味の口縁部で、端部が肥厚するものもある。内外面に指頭圧痕が観察される。1011~1013は、内面に布目痕がみられる。(註14)

・須恵器系瓦質土器(第310図・写真図版90)

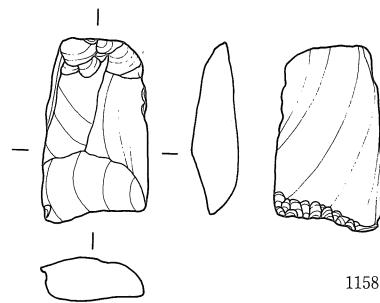
ここでは、器形や整形技法が須恵器的である瓦質土器を指す。1035は、須恵器の甕に通じるもので、外面平行タタキ、内面波状タタキで整形されている。1036は甕で、外面に5条の沈線がめぐり、その下位に平行タタキが施され、内面は縦方向のケズリで整形されている。

・土製品(第311~313図・写真図版90)

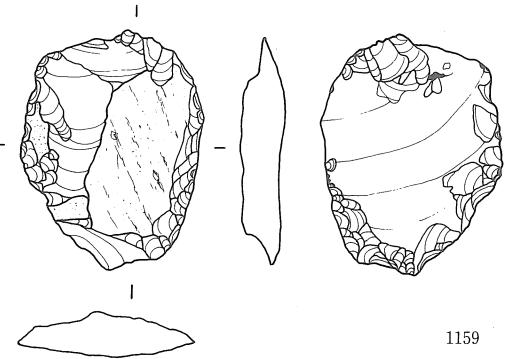
1037~1048(第311図)は、轍の羽口である。1049~1067(第312図)は、土錘である。1049~1051は球形、1052~1054、1057、1059は棗形、1055、1056は円柱形、1058、1060~1065は紡錘形を探り、それぞれ長軸方向に穿孔するものである。1066、1067は角柱形で、長軸に直行する穿孔である。1068~1070(第312図)は手捏土器である。1071(第312図)は甕である。外面ハケ調整、内面ケズリ調整で、基部に穿孔がある。1072~1074(第312図)は甕である。1072は、羽釜状の庇を有する受け部で、外面指頭圧痕、内面横方向のケズリが観察される。1073、1074は基部で、内面ハケ調整である。1073は底面をハケ調整し、1074はケズリ調整している。1075、1076(第313図)は支脚である。1077、1078(第313図)は、須恵質の土馬である。1077は、頸部と左前足、尾を欠くものである。肛門部に刺突がみられるが、尾の装着に伴う処理か。また、腹部の後足間が溝状にくぼみ、刺



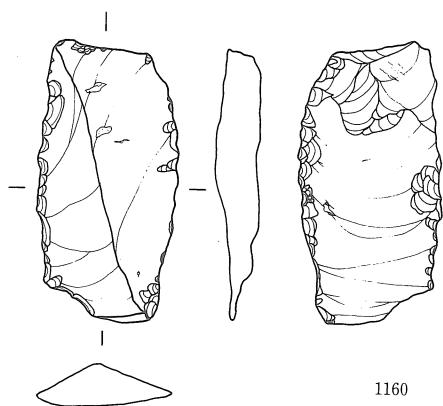
第318図 遺構外出土遺物(石製品)実測図(18)



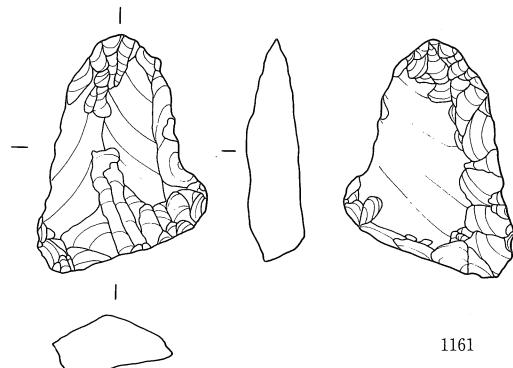
1158



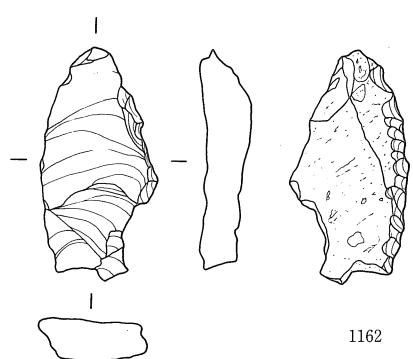
1159



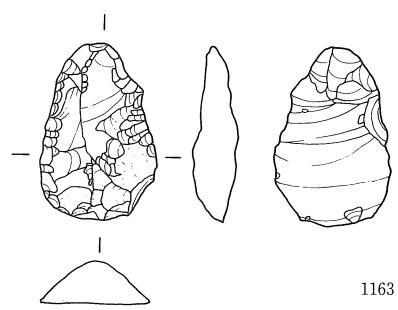
1160



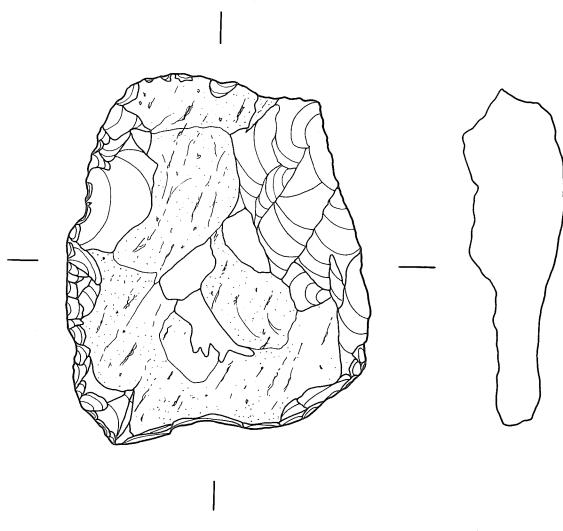
1161



1162



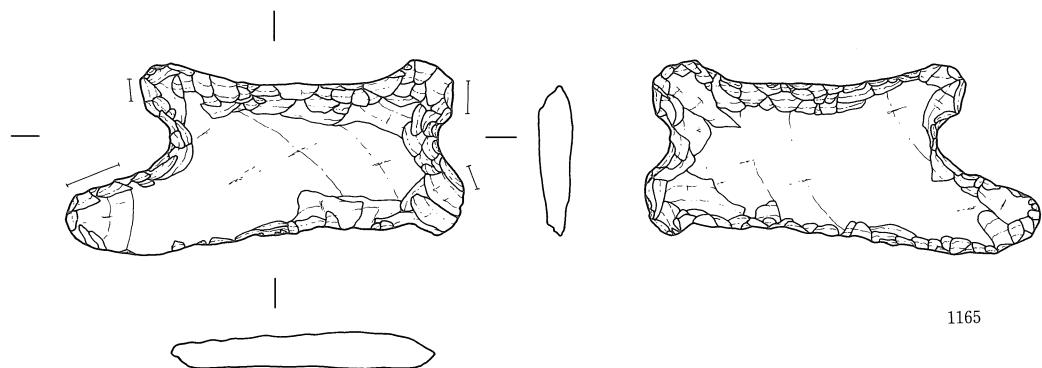
1163



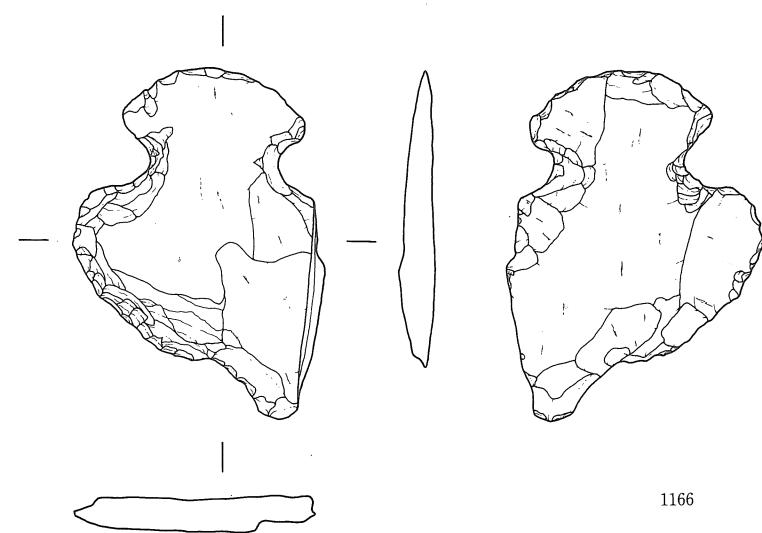
1164

0 S = 1 : 1 3 cm

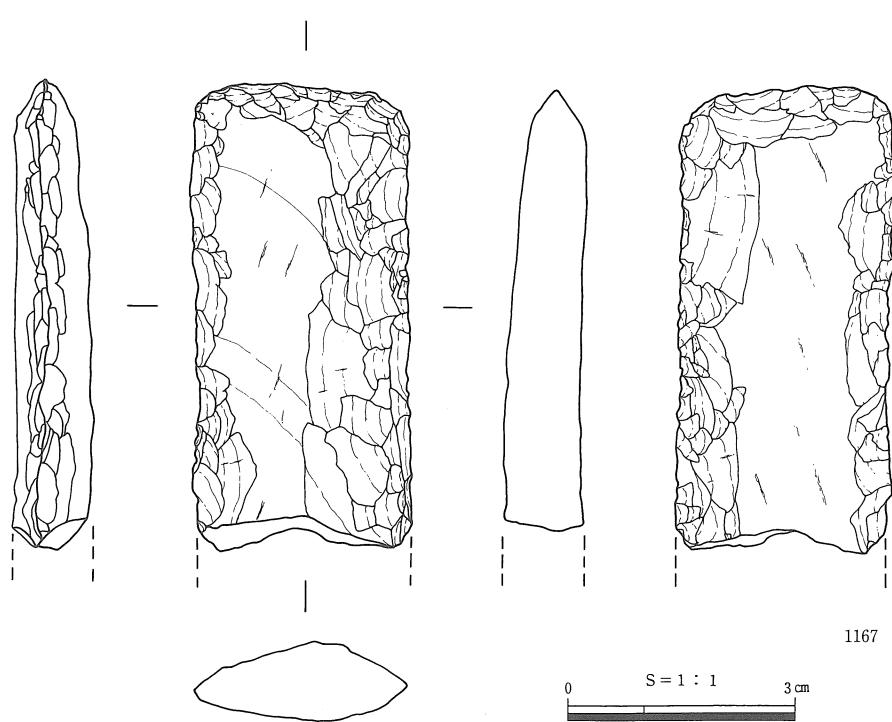
第319図 遺構外出土遺物(石製品)実測図(19)



1165



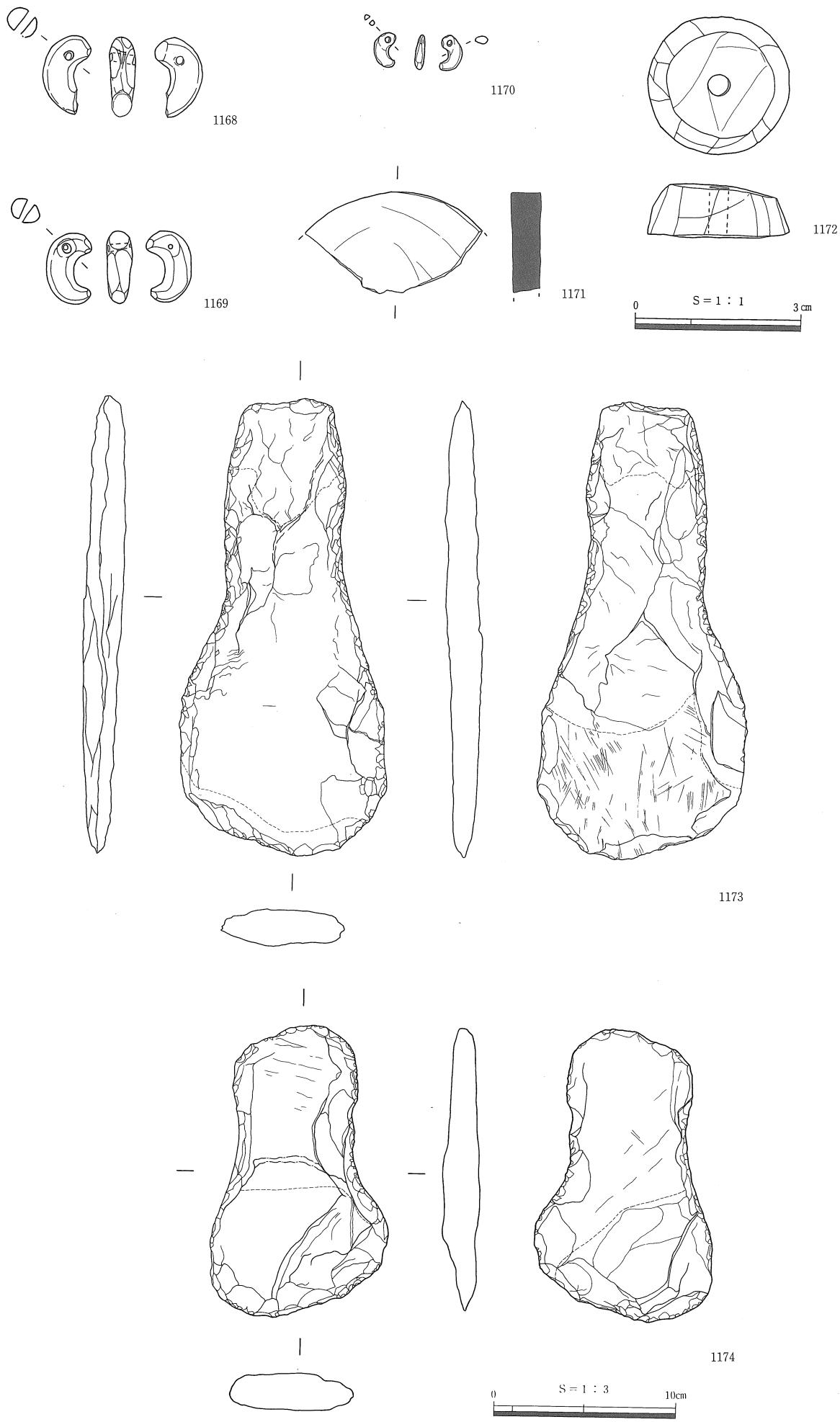
1166



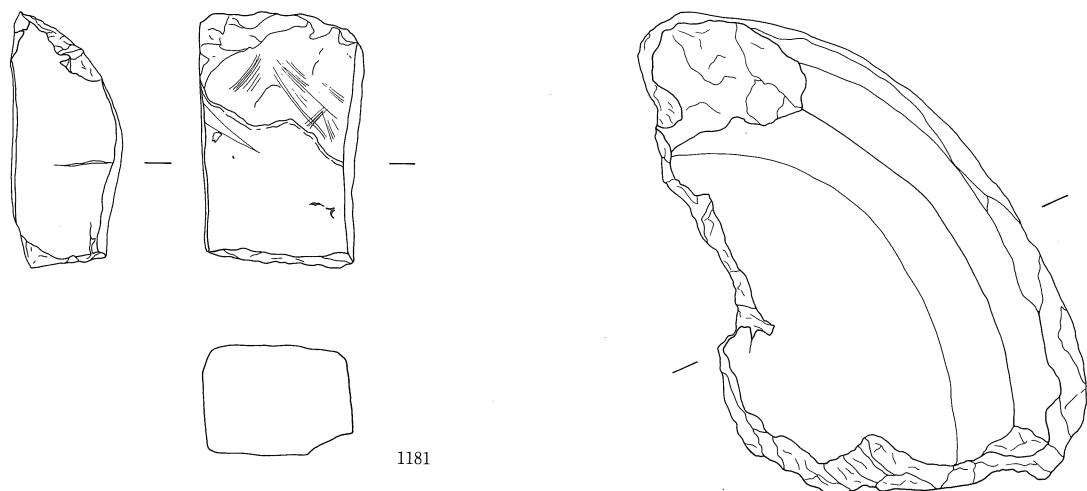
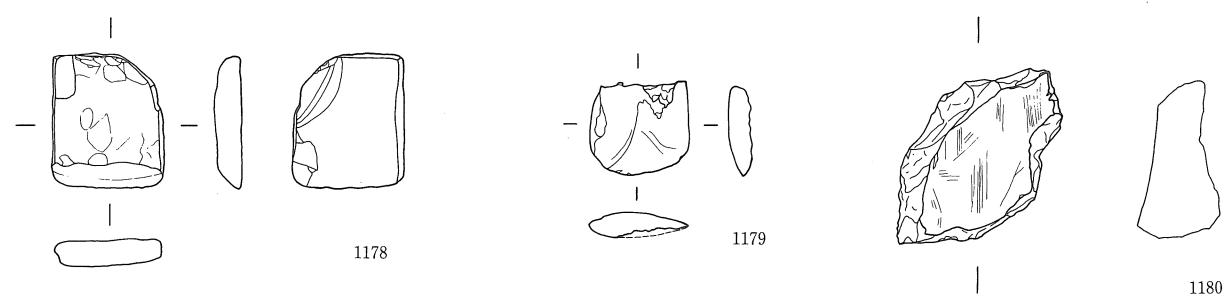
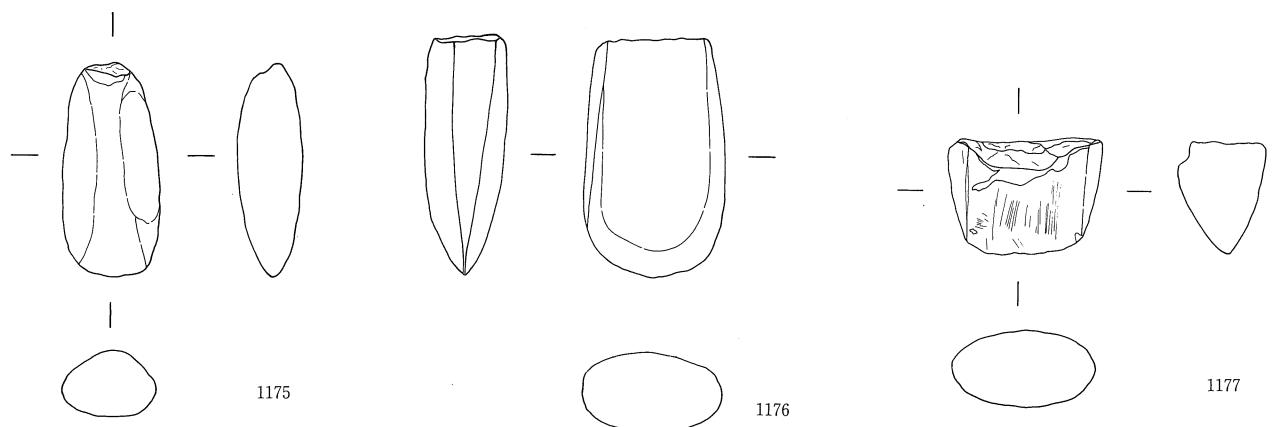
1167

0 S = 1 : 1 3 cm

第320図 遺構外出土遺物(石製品)実測図(20)

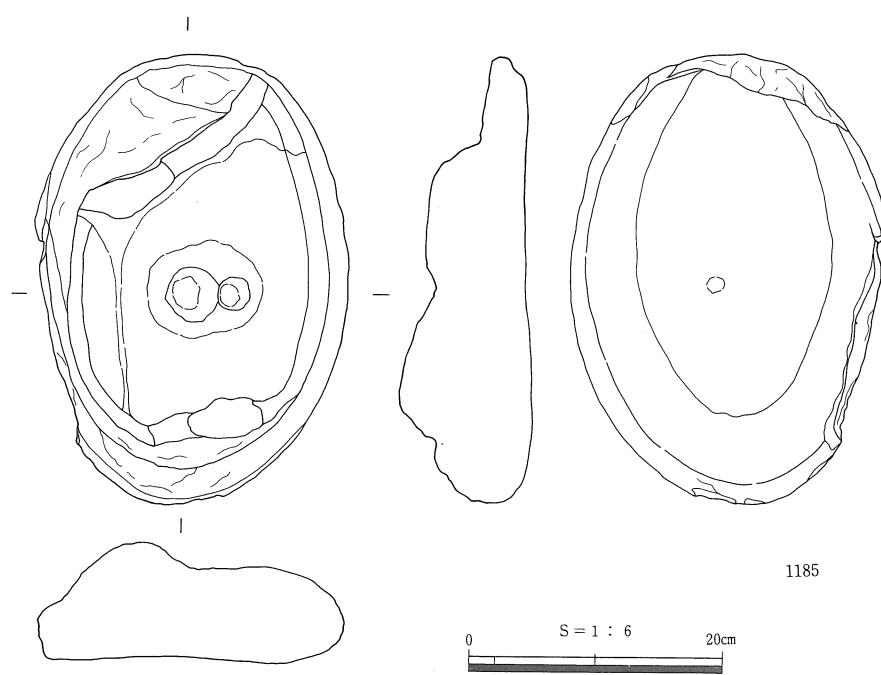
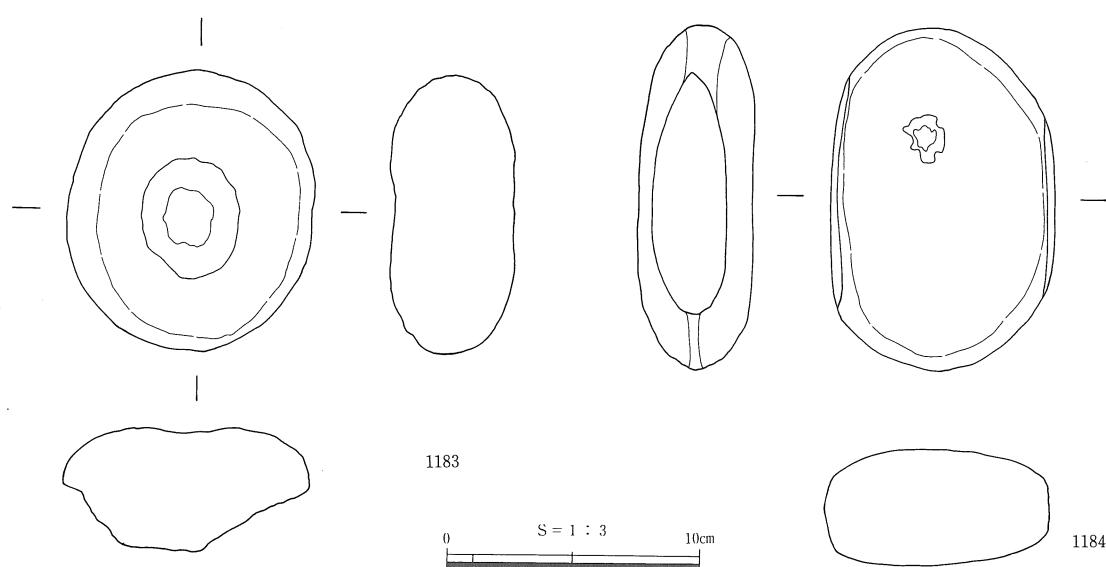


第321図 遺構外出土遺物(石製品・土製品)実測図(2)

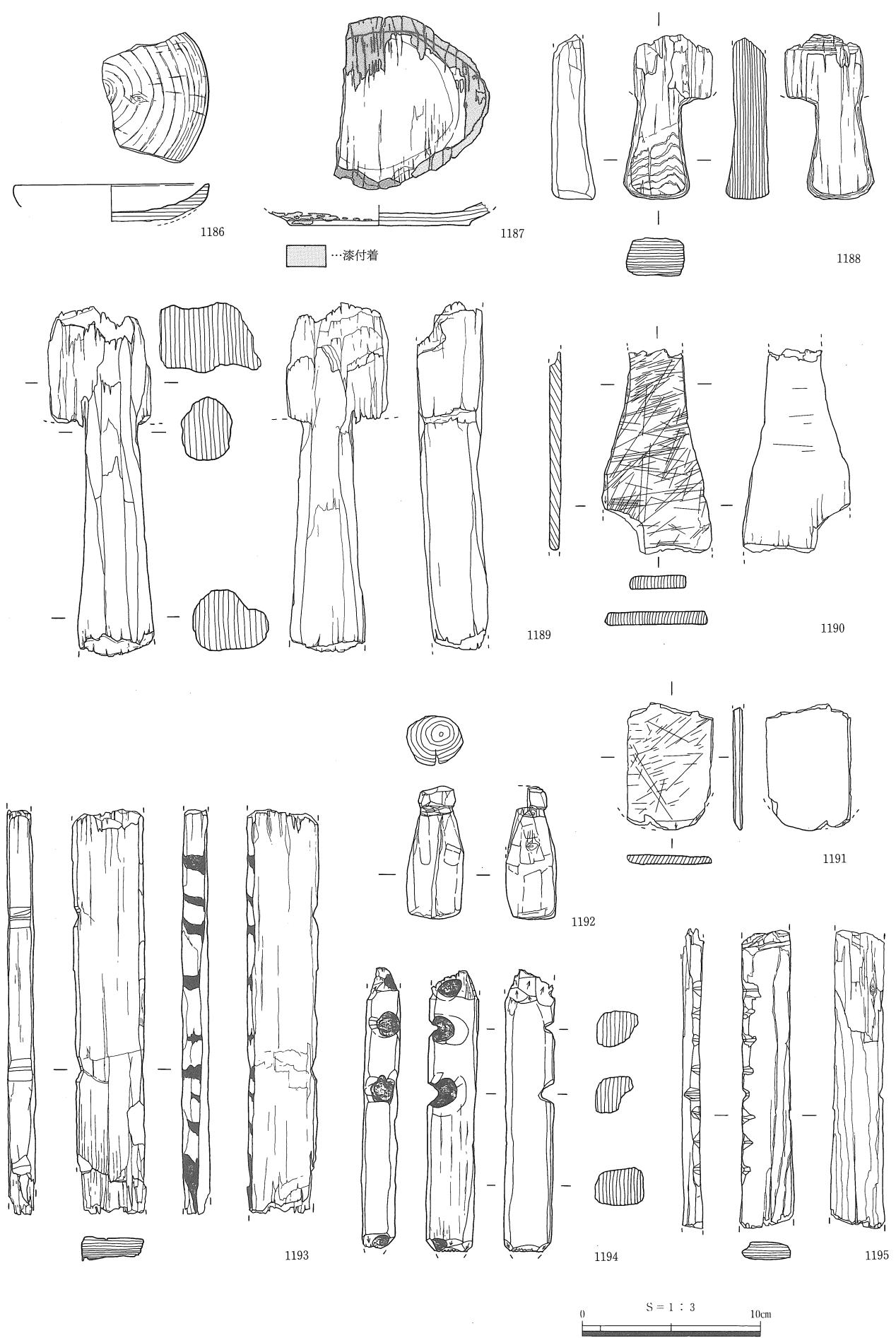


0 S = 1 : 3 10cm

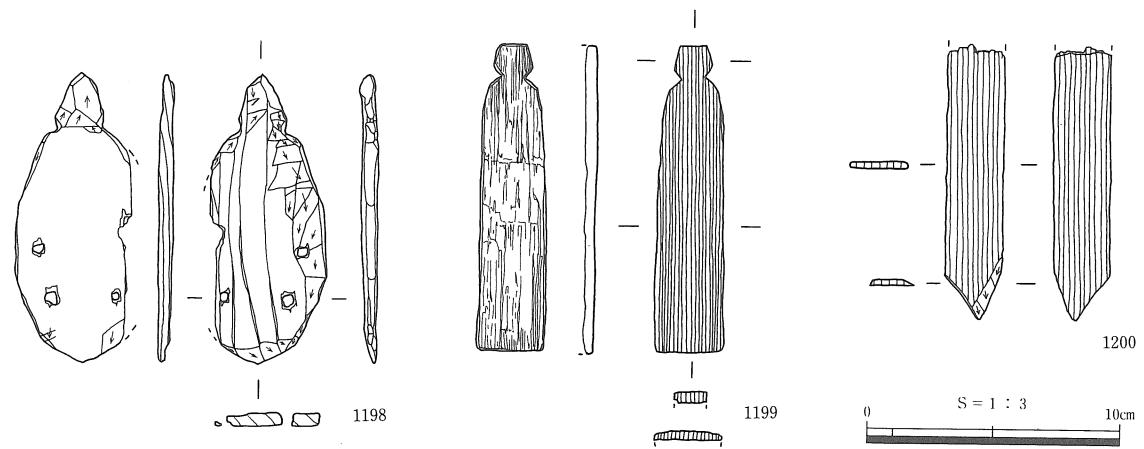
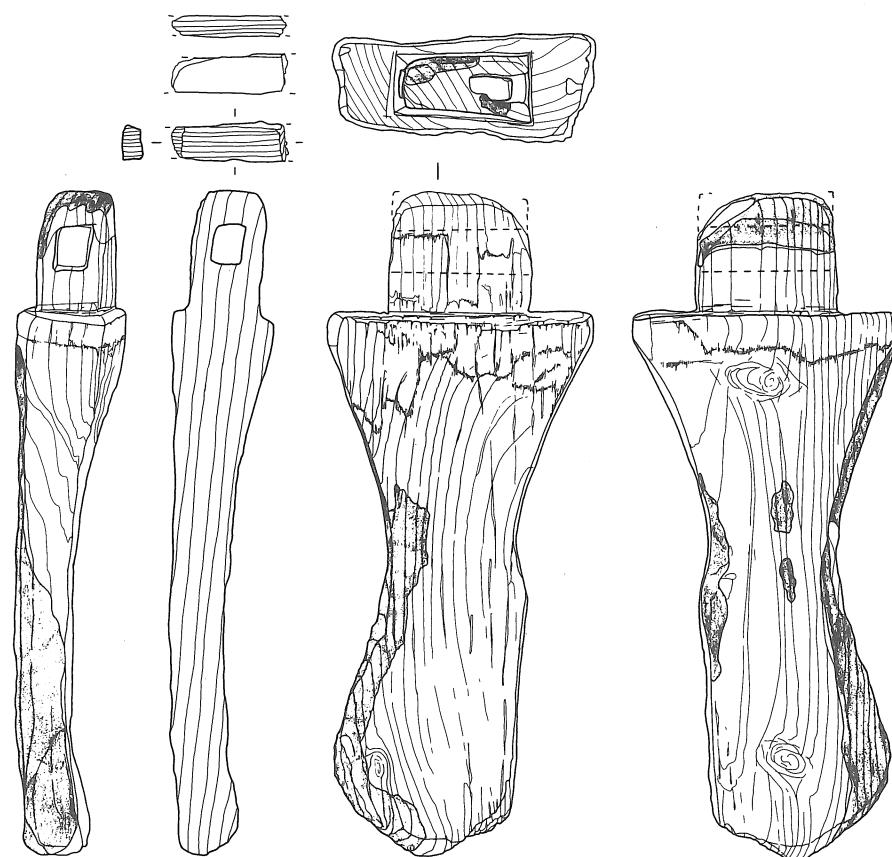
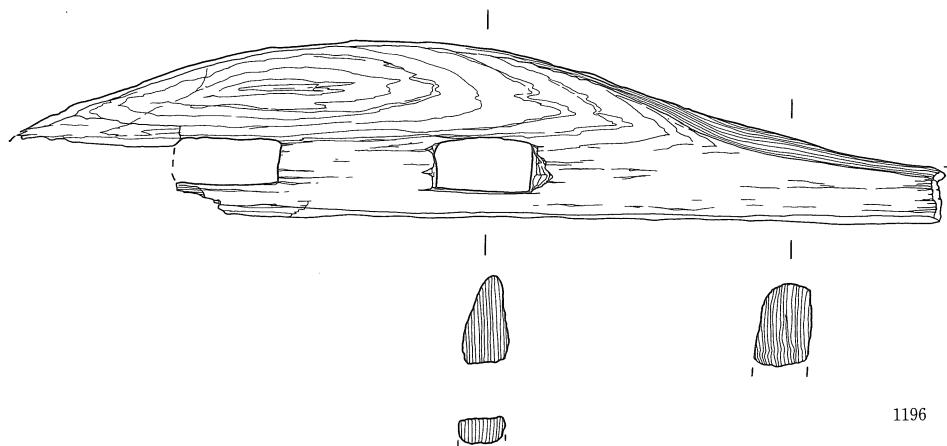
第322図 遺構外出土遺物(石製品)実測図(2)



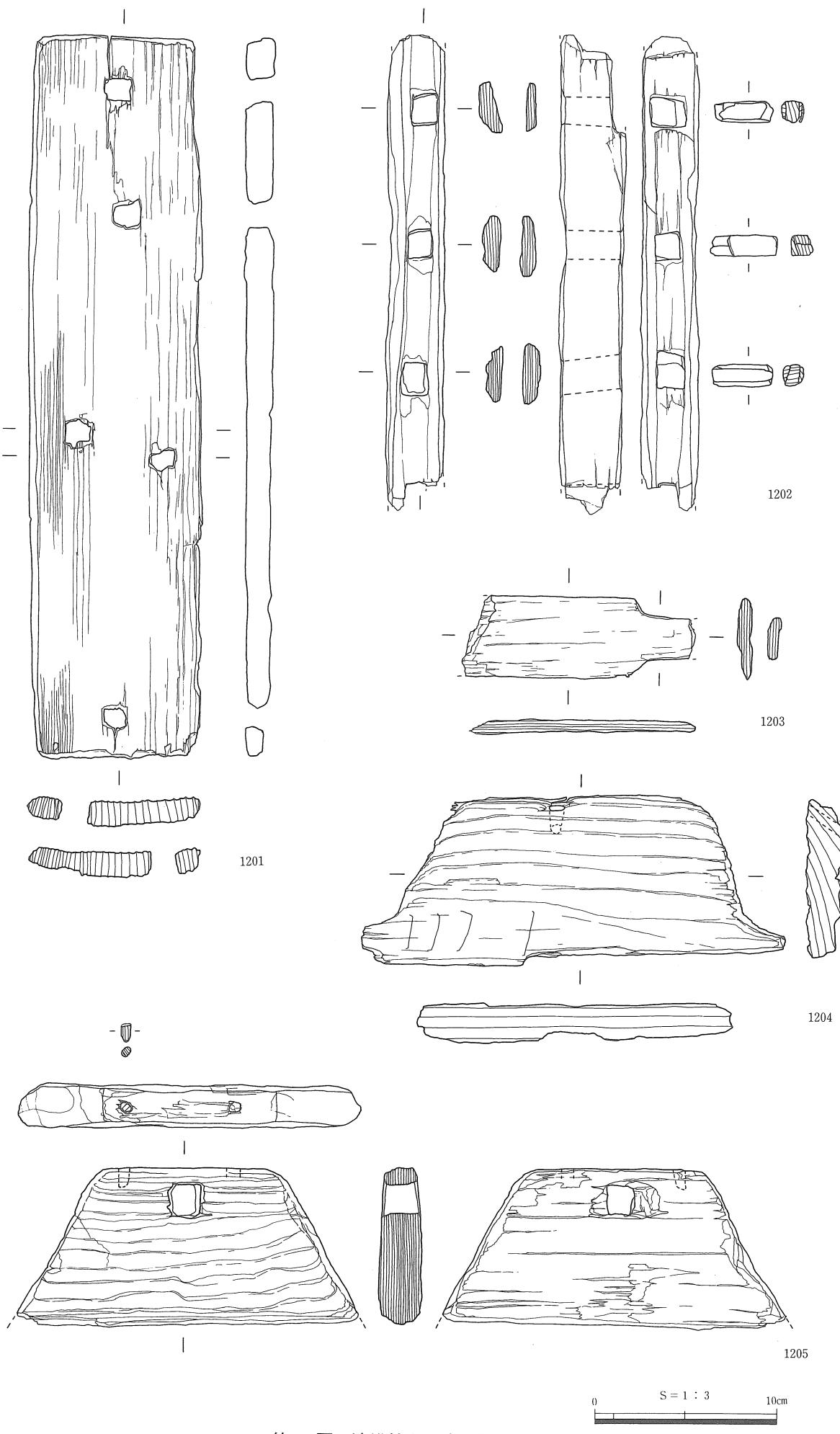
第323図 遺構外出土遺物(石製品)実測図(2)



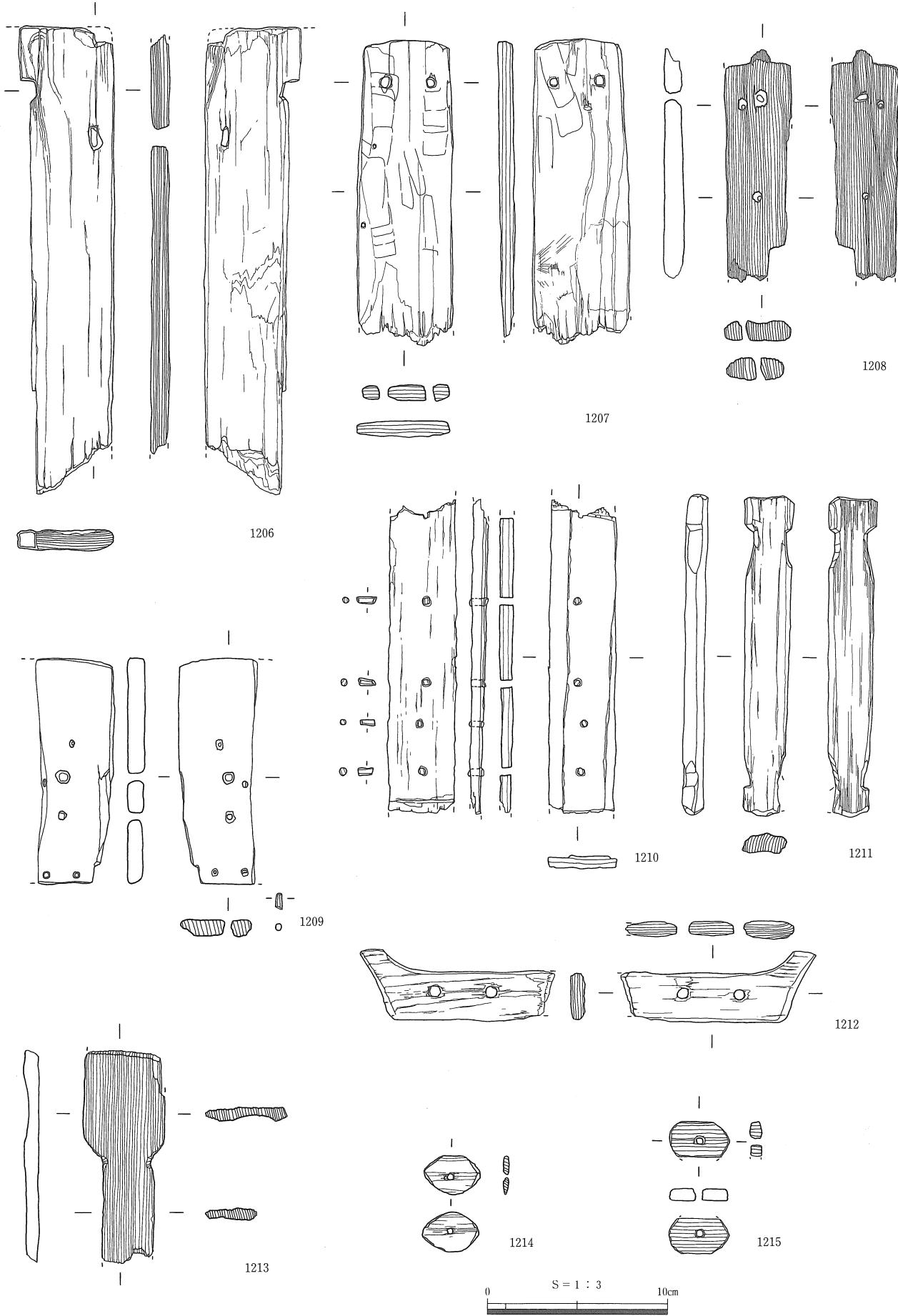
第324図 遺構外出土遺物(木製品)実測図(24)



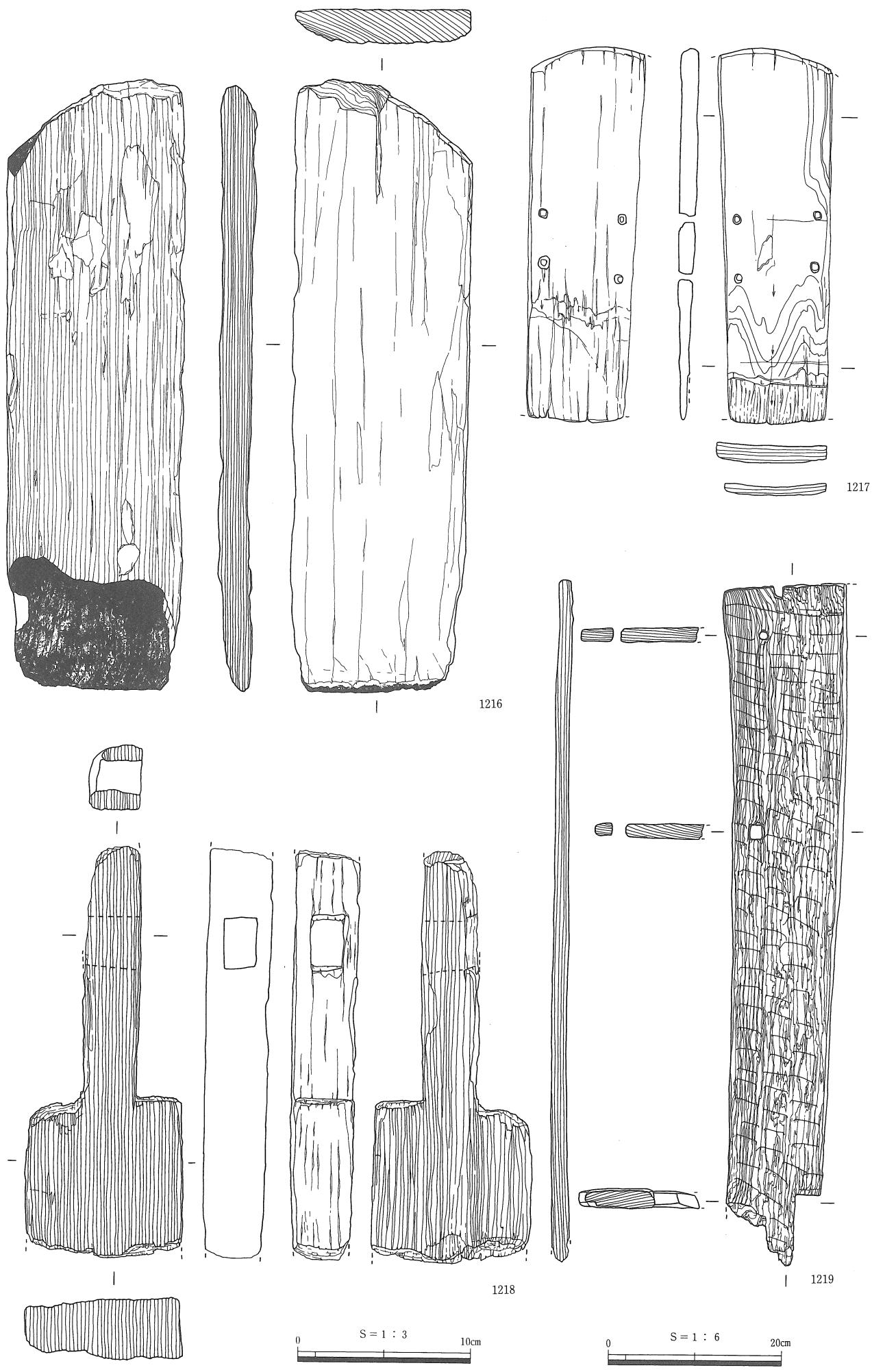
第325図 遺構外出土遺物(木製品)実測図(25)



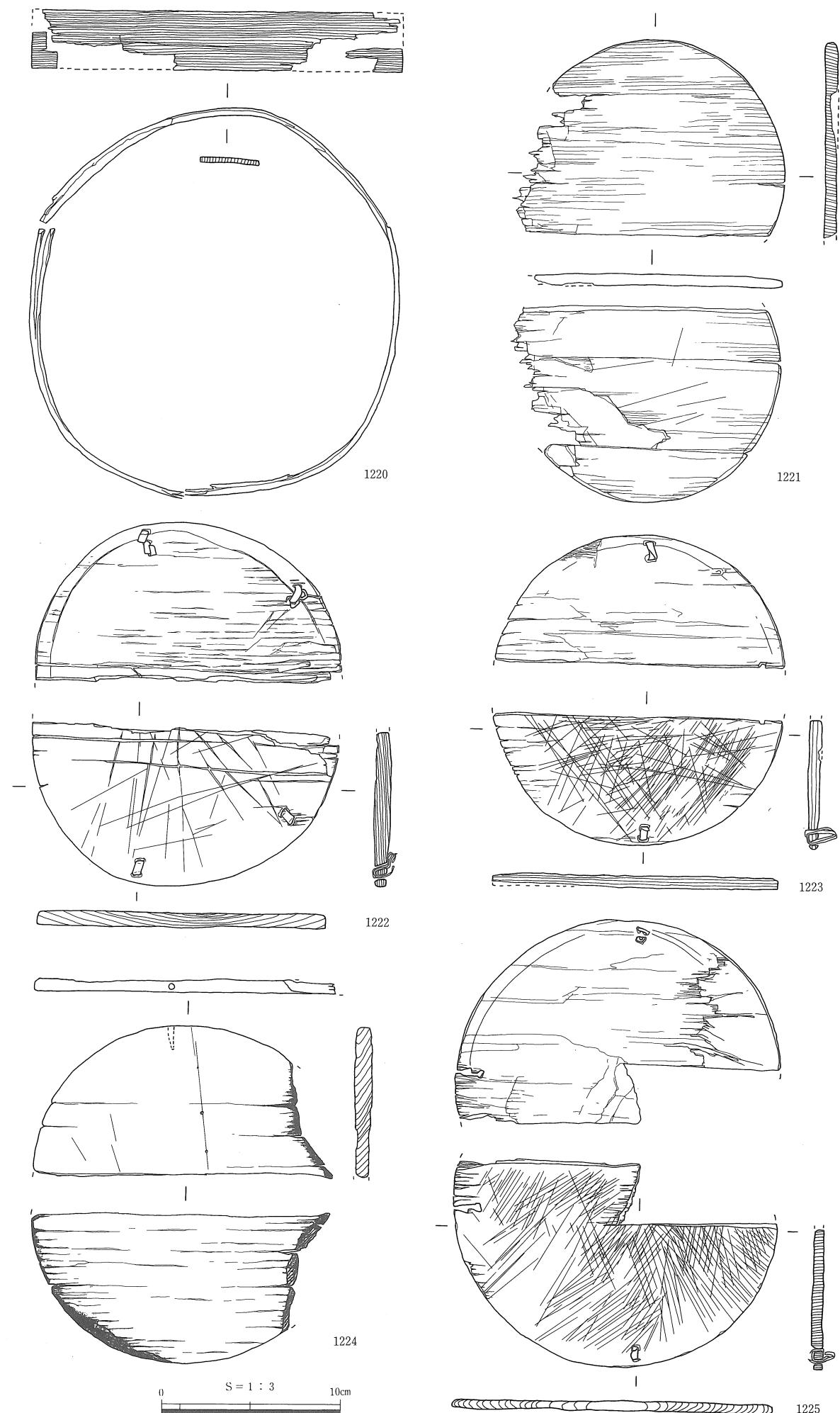
第326図 遺構外出土遺物(木製品)実測図(26)



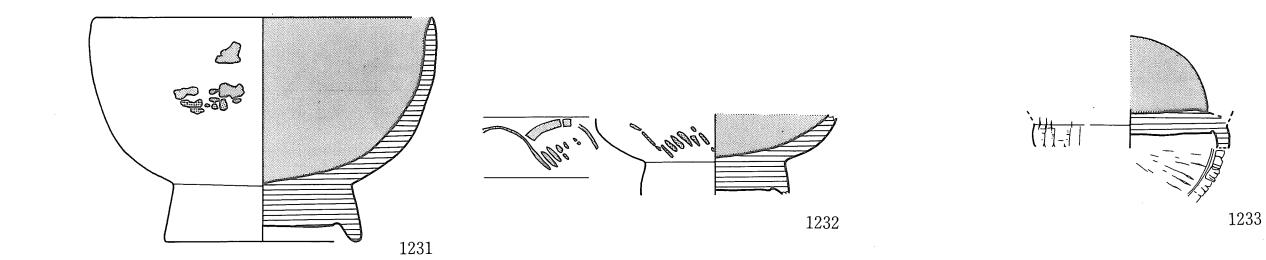
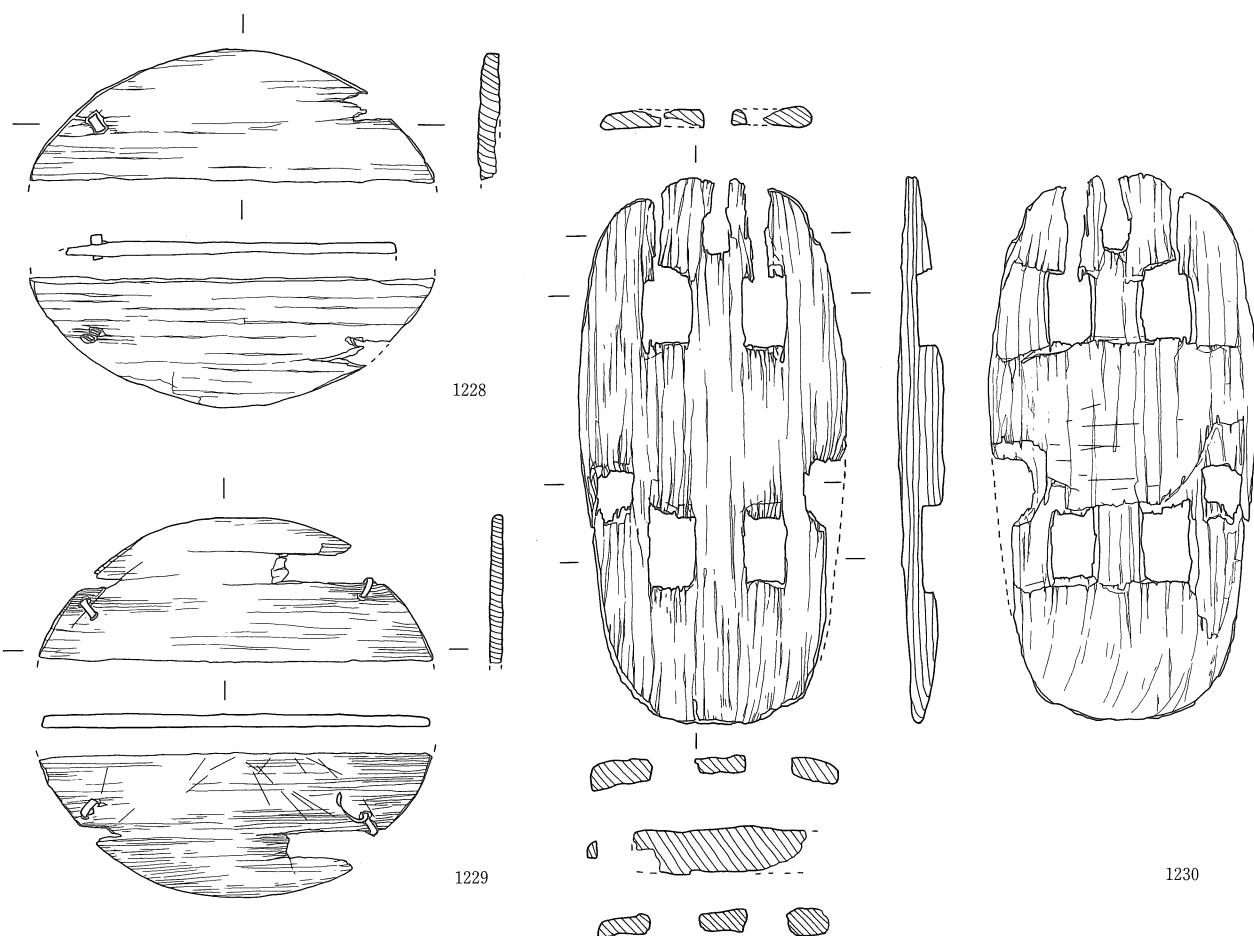
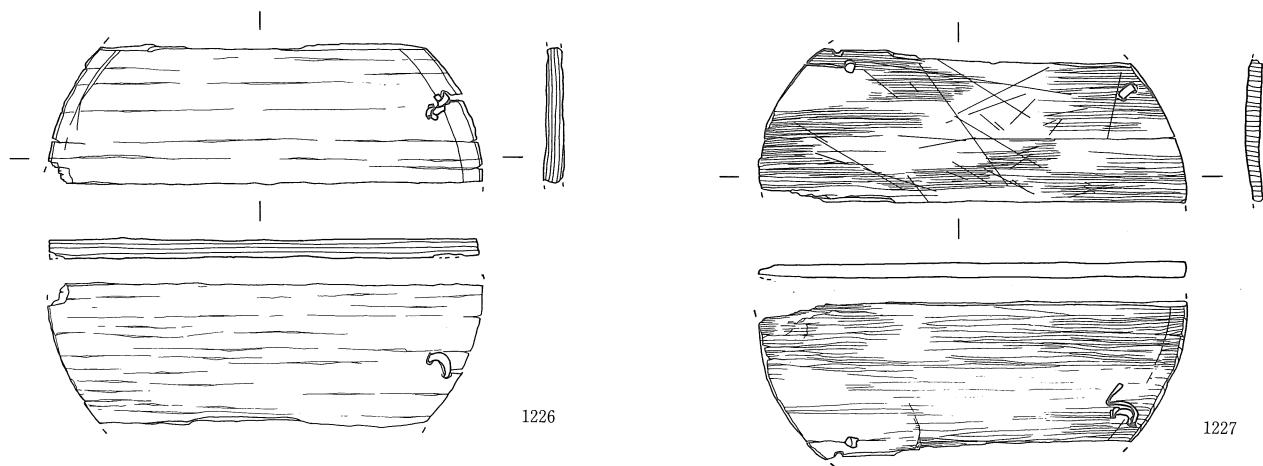
第327図 遺構外出土遺物(木製品)実測図(27)



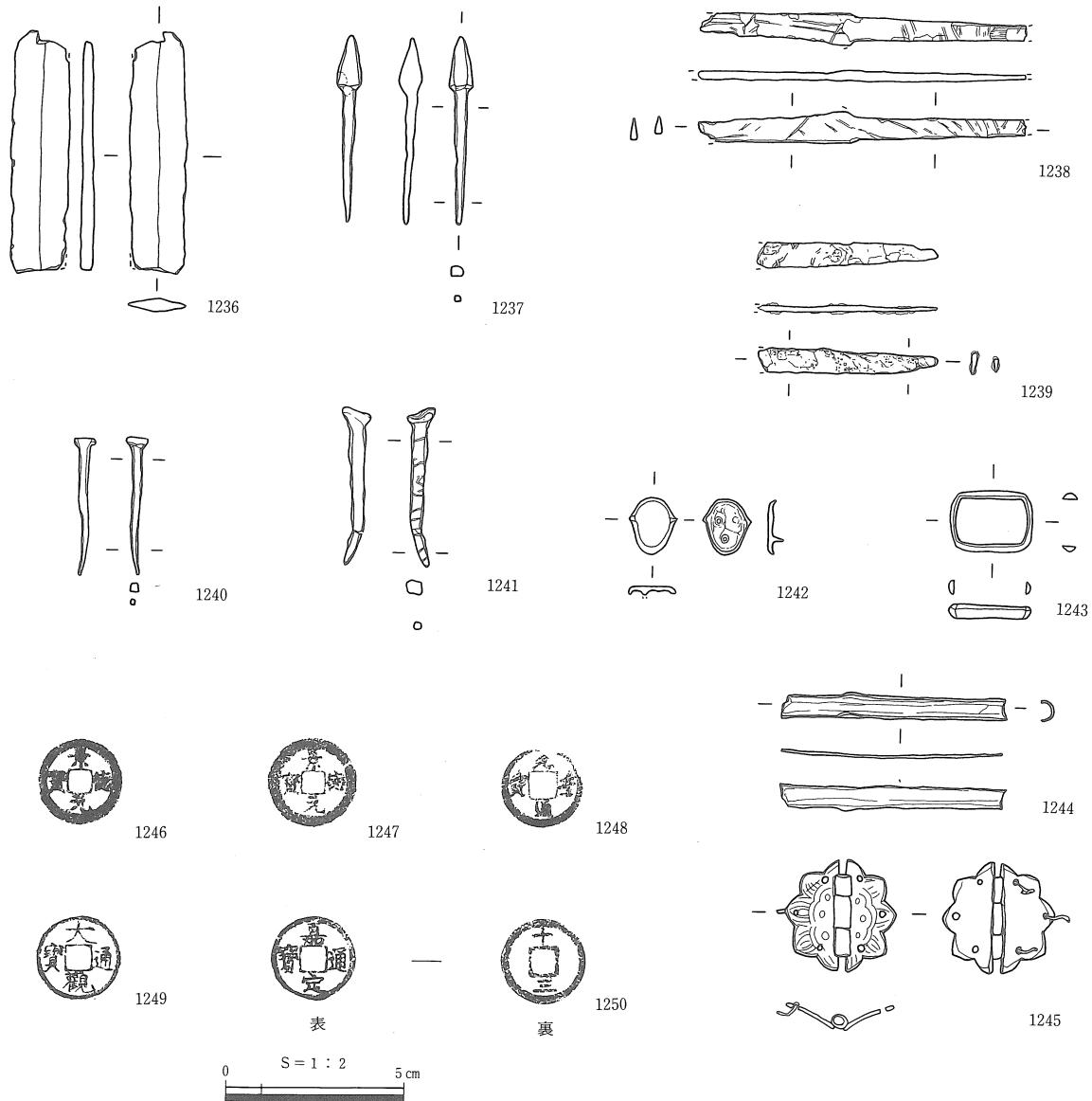
第328図 遺構外出土遺物(木製品)実測図(28)



第329図 遺構外出土遺物(木製品)実測図(29)



第330図 遺構外出土遺物(木製品)実測図(30)



第331図 遺構外出土遺物(金属製品)実測図(3)

突がみえる。本来生殖器を装着していたものか。1078は胴部以外全てを欠くものである。1079(第313図)は、布目とタタキが観察される平瓦である。

・土師質土器(第314図)

1080、1081、1084~1087は壊で、1080、1081は高台付きである。いづれも糸切り底である。1082、1083は高台付きの小皿で、1082は内面を黒色処理する黒色土器である。1088は甕で、外面斜め方向、内面横方向のハケ調整である。1089~1092は鍋、1093~1097は鉢である。

・陶磁器類(第315~317図・写真図版90、91)

1098~1102は須恵質土器で、1098~1100は13世紀後半~14世紀前半の東幡系のこね鉢、1101、1102は勝間田・亀山系の格子目タタキの甕の胴部である。1103~1111は焼締陶器で、1103~1107は備前焼、1108~1111は越前焼である。1103、1104は擂鉢、1105、1107は壺の底部で、1106は備前V期にみられる船徳利である。1105には、漆状の付着物がみられる。1108~1110は甕で、1110の外面にはタタキが観察される。13世紀後半~14世紀初頭に位置づけられる。1111は擂鉢である。1112~1123は輸入品である。1112~1118は青磁である。1112、1113は12世紀代で、1112は輪花皿、1113は同安窯系の碗である。1114は瓶形をなす。1115は15世紀以前、1116は16世紀前半以降の碗である。1117は高台部を円盤状に打ち搔いたものである。1119、1120は天目である。1121は李朝系の焼締

陶器で、16世紀代の船徳利であろう。1122は李朝系あるいは華南系と思われる焼締陶器で、16世紀末～17世紀初頭に当たれよう。1123は明代の染付磁器で、16世紀後半に位置付けられる。1124～1136は国産陶磁器である。1124～1127は瀬戸・美濃系の陶器で、1124、1125は大窯のIII期で16世紀後半に位置付けられる。1126、1127は天目で、1126は大窯III～IV、16世紀後半以降、1127は16世紀末～17世紀初頭に位置付けられる。1128～1135は肥前系の陶磁器である。1128、1130は16世紀末～17世紀初頭、1131、1133は陶胎染付で18世紀代の唐津焼である。1129、1132、1134、1135は伊万里の染付磁器で、1129、1134は18世紀代である。1136は17世紀～18世紀の京焼で、煎茶用の茶碗である。1137～1140は、瓦質土器である。1137、1138は炭壺で、1137は口縁部が外反気味で、端部が溝状にくぼむ。1138は内湾気味の器形で、口縁端部は内傾して尖る。穿孔がみえる。両者とも外面横方向のハケ調整、内面縦方向のケズリ調整で、ケズリの単位が同一である。1139は鍋と思われ、内面横方向のハケ調整である。1140はつまみを有する蓋で、端部を打搔き、内面を上にして、灯明皿に転用したものである。打搔いた断面に煤が付着している。

・石製品（第318～323図・写真図版91）（註15）

1141～1146は黒曜石製、1147～1151は安山岩製の石鎌である。1152は黒曜石製の石錐で、1153～1156は黒曜石製、1157は安山岩製の楔形石器である。1158～1164は黒曜石製のスクレイパーである。1165は安山岩製で、両端に抉りを入れ、4角が突出する形状である。1166は安山岩製の石匙で、1167は安山岩製で柄状の石器だが、石剣の可能性も考える。1168、1170は滑石製、1169は璧玉製の勾玉である。1172は優白質細粒花崗岩製の紡錘車で、1171は須恵質の紡錘車である。1173、1174は無斑晶板状安山岩製の石鋤である。1175～1179は石斧で、1178は片刃石斧である。1175、1178は細粒閃綠岩製、1176は砂岩製、1177は緑色砂岩製、1179は結晶片岩製である。1180は凝灰質砂岩製、1181は砂岩製の砥石である。1182は黒雲母角閃石石英安山岩製の石臼である。1183は斑禿岩製、1184は閃綠岩製の磨石である。1185は砂岩製の石皿である。

・木製品（第324～330図・写真図版91）（註16）

1186、1187は皿状容器、1188、1189は柄である。1190、1191は籠、1193～1195は火鑽板である。1195は炭化部分がみられず、未使用品と思われる。1192は木錘か。1196、1197は調度品の部品か。1198は軍配形の加工板、1199、2000は荷札か。1201は大足、1202は大足の外枠、1203は大足の横棒か。1204、1205は台形をなすもので、小口面に目釘が打たれている。1206～1210、1212は有孔の加工板、1211は両端に抉りを入れている。1213は荷札か。1214、1215は棗形の小板の中央に穿孔するものである。1216は片側に焼きを入れてとがらせ、矢板として使用したものか。1217は有孔の加工板の片側を削りだし、矢板に転用したものか。1218、1219は建築部材か。1220は曲物の枠材、1221～1229は曲物の底板である。1230は差歎下駄の台である。1231～1235は漆器椀で、内面は赤漆塗り、外面は黒漆地に赤漆で文様を描いている。

・金属製品（第331図）

1236は鉄剣、1237は鉄鎌である。1238、1239は鉄刀子、1240、1241は鉄釘である。1242～1245は銅製の部品で、1245は蝶番である。1246～1250は銅錢である。1246、1247は景德元寶（北宋・1044年初鑄）、1248は元豐通寶（北宋・1078年初鑄）、1249は大觀通寶（北宋・1107年初鑄）、1250は嘉定通寶（南宋・1208年）である。1250の裏面には「十三」とみえる。

遺物番号	種別	樹種	遺物番号	種別	樹種	遺物番号	種別	樹種
987	木簡	スギ	1197	卓の脚?	スギ	1216	矢板?	ヒノキ
1187	皿状容器	ケヤキ	1198	軍配形加工板	スギ	1217	有孔板転用矢板	スギ
1188	柄	スギ	1199	荷札?	ヒノキ	1218	枘付建築部材?	スギ
1189	柄	スギ	1200	荷札?	スギ	1219	建築材	スギ
1190	箆	ヒノキ	1201	大足足板	スギ	1220	曲物枠材	ヒノキ
1191	箆	スギ	1202	大足外枠?	ヒノキ	1221	曲物底板	ヒノキ
1193	火鑽板	ヒノキ	1205	台形状加工板	ヒノキ	1222	曲物底板	ヒノキ
1194	火鑽板	スギ	1211	抉入加工板	ヒノキ	1223	曲物底板	ヒノキ
1195	火鑽板	ヒノキ	1213	荷札?	スギ	1225	曲物底板	スギ
1196	有孔加工板	スギ	1215	有孔小板	スギ	1230	差歛下駄の台	ヒノキ

木製品樹種一覧表

※木製品の樹種については、鳥取大学農学部環境樹木学研究室教授古川郁夫先生にご鑑定いただいた。

- 註1 陰田マノカンヤマ遺跡久幸池地区S I - 1出土例参照（本書本文編I第4章第3節）
- 註2 大山町教育委員会山口剛氏のご教示による。
- 註3 萩本勝・佐古和枝 「第4節；須恵器について」 『陰田』 米子市教育委員会 1984年
- 註4 『長瀬高浜遺跡発掘調査報告書』 V 鳥取県教育文化財団 1983年 P178参照
- 註5 「田知」の読みについては、房総風土記の丘穴澤義功先生にご教示いただいた。
- 註6 木簡の樹種については、鳥取大学農学部古川郁夫先生にご鑑定いただいた。
- 註7 「田知」と「館」の関係については、穴澤義功先生にご教示いただいた。
- 註8 今谷明 「館」『日本史大事典』 平凡社 1993年
- 註9 文字の読みについては、鳥取県立博物館坂本敬司氏にご教示いただいた。
- 註10 三辻利一 「陰田遺跡群出土須恵器の蛍光X線分析」 （本書第9章第1節）
- 註11 内田律雄 「3 鳥取県・島根県」 『日本土器製塩研究』 近藤義郎編 青木書店 1994年
- 註12 漆については、国立歴史民俗博物館永嶋正春先生にご鑑定いただいた。（本書第7章第5節）
- 註13 古川郁夫先生にご教示いただいた。
- 註14 製塩土器については、島根県教育委員会内田律雄氏よりご教示いただいた。
- 註15 石製品の石材については、鳥取大学教育学部赤木三郎先生にご鑑定いただいた。
- 註16 木製品の樹種については、鳥取大学農学部古川郁夫先生にご鑑定いただいた。

第4節 陰田小犬田遺跡の古環境について（第282、283図・写真図版54、64、65）

ここでは、古環境研究所によるプラント・オパール分析と植物珪酸体分析の結果をもとに、本遺跡の古環境について考察する。プラント・オパール分析の結果、本調査地ではサンプリングA・C地点8層、B地点7層以上において水田耕作が行われていた可能性が示唆された。A・C地点の8層は、本調査において水田層上層と称した層であり、この下層からは畦畔を伴う最古の水田層が検出された。ここでは水田層直下の面にあたる青灰色シルト層（A地点10層・B・C地点9層）堆積以降の周辺地域の古環境について考察する。

植物珪酸体分析の結果によると、この青灰色シルト層からはクマザサ属型の植物珪酸体が高い密度で検出されている。A地点ではサンプリングした全ての地点から、このクマザサ属型の植物珪酸体が高い密度で検出されているが、その検出密度は上層に行くほど低くなる。また、C地点12層ではクマザサ属型に限らず、イネ科全体の検出密度が非常に低くなっている。この点については、今回の植物珪酸体分析データからは明確な意味付けができるない。推定生産量においても全体的にクマザサ属型が卓越しており、単純に分析結果から判断すると、C地点12層を除く全てのサンプリング土壤は、クマザサ属が生育するような、比較的乾燥した地域の土壤と推測できる。また、イネのプランツ・オパールが高い密度で検出されたA・C地点8層やB地点7層からは、比較的湿った土壤条件に生育するヨシ属が高い密度で検出されており、水田層形成期の前後に大きく環境が変化したことが推測される。本調査地は、三方を丘陵に囲まれており、降雨時には絶えず丘陵からの流水が見られる低湿地であり、乾燥地であったとは考え難い。地形的を見て、本調査地は沖積地と考えられ、植物珪酸体分析のサンプリング土壤も、遺跡周辺部から流れ込みによって堆積した土壤であると推測される。周辺は丘陵地であるため水はけもよく、クマザサ属の繁殖も容易に推測でき、植物珪酸体分析結果とも一致する。

以上の点から、水田層形成以前の本調査地には、荒神谷山の谷地形や自然河川SD-3を背景とする氾濫原が広がっていたものと考えられる。氾濫原は周辺丘陵部からの土壤の堆積に伴い、徐々に安定した湿地帯となり、中世以降の開墾によって、この湿地帯に水田耕作が始まったものと推測できる。丘陵部の浸食が進むほど、本遺跡に堆積する土壤の含有する植物珪酸体密度は徐々に低くなると考えられる。このことは、サンプリングA地点に見られるヨシ属とクマザサ属型の植物珪酸体密度の変化にはっきりと表れている。本遺跡西側に隣接する荒神谷山では、地山層および地山層につながる青灰色シルト層上に谷地形が形成されており、その延長部が陰田小犬田遺跡からも河川跡として検出されている。これによって荒神谷山から運ばれた土壤が本調査地南西部に堆積して、最古の水田層を形成したものと推測できる。また陰田荒神谷遺跡には、斜面を加工して構築したテラス状の遺構が検出されている。本調査地には、この際生じた大量の土砂も堆積していることが十分に想像できる。

本調査地は現況で海拔4.5~5.5m、青灰色シルト層上面は海拔3.5~4.5mを測る。サンプリングA地点9層からはカイメン棒針が検出されているが、海水性か淡水性かは不明であり、9層への流入経緯もまた不明である。青灰色シルト層の上層からはサルボウ、ヤマトシジミといった二枚貝が出土しているが、ともに海水~汽水性の貝である。

No	地 点	遺物	種 別	部 位	備 考	No.	地 点	遺 物	種 別	部 位
1	SD-1	骨	種不明	骨片		10	dT7	歯	種不明	歯牙片
2	SD-1	骨	種不明	骨片		11	a区	二枚貝	サルボウ?	
3	aT2付近	骨	種不明	骨片		12	aT4	二枚貝	サルボウ	
4	SD-1	骨	シカ	上腕骨		13	a区	二枚貝	サルボウ	
5	dT15	骨	シカ	鹿角		14	a区	二枚貝	サルボウ?	
6	bT16	骨	ウマ			15	bT12	二枚貝	サルボウ	
7	bT11~15	歯	ウマ	歯 (部位不明)	細片化	16	SD-1	二枚貝	ヤマトシジミ	
8	bT11~16	歯	ウマ	歯 (部位不明)	細片化	17	a区	二枚貝	種不明	
9	bT11~16	歯	ウマ	歯 (左上顎大臼歯)		18	bT 1	二枚貝	種不明	

陰田小犬田遺跡出土動物遺体一覧表

※動物遺体については、鳥取大学医学部井上貴央先生にご鑑定いただいた。